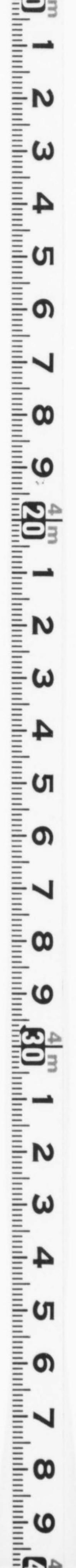


87

庫文省法司			
			和書
			政治及法律部
一	冊架函號		門

奧國治罪法序說





奧國治罪法序說

司法省

B620
B 4
1

奧國治罪法序說

余輩ノ翻譯セシ所ノ奧國治罪法ハ即チ千八百七十四年一月ヨリ施行セシモノナリ(但シ奧地利ニ於テ之ヲ施行シ匈牙利國ニ及ホスヲ得ス)蓋シ第十九紀ノ始メヨリ奧國ニ於テ治罪法ヲ改正廣告セシコト凡テ四回ト爲ス而シテ此治罪法ハ實ニ第四回ノ改正ニ係ル夫政治ノ改釐ハ刑律上ニ變動ヲ生出スルハ識者ノ普ク理解セシ所ナリ故ニ政治沿革ノ多キ奧國ニ於テ屢々治罪審査ニ關スル法律ヲ改正セシハ尙モ驚怪スルニ足ラサル所ナリ七十年來各種ノ法典ヲ以テ該國ヲ管治セリ即チ千八百三年千八百五十年千八百五十二年及ヒ千八百七十三年ノ法典是レナリ

此最後ノ立法ハ詢ニ盛大不刊ノ典ト謂フヘシ蓋シ千八百六十七年來奧國立法ノ諸部ニ就テ許多ノ改革ヲ爲シタル自由ノ精神ヨリ生出セシモノナリ余輩該法典全部ヲ翻譯シ且ツ註解ヲ附加シ以テ緊重ナル成規ヲ明白ニシ讀者ヲシテ眼目ヲ著大ナル改革上ニ誘致セシメント冀望ス因テ余輩ハ此ニ該法典ノ或ハ舊來ノ法典ニ違反シ或ハ佛國治罪法ノ主義ト齟齬セル部分ヲ簡明ニ論述シ以テ注目セシム他ハ敢テ贅言セサルナリ

此序說ノ要旨ヲ分別シテ三章ト爲ス

第一章ハ千八百三年千八百五十年及ヒ千八百

五十三年ノ法典ニ拠レル煥國治罪ノ査覈ニ係
第二章ハ千八百七十三年五月二十三日ノ法典
編成沿革ニ係ル

第三章ハ新治罪法ノ要畧ニ係ル

第一章 千八百三年千八百五十年及ヒ十
八百五十三年ノ法典ニ拠レル煥國治罪
ノ査覈

千八百三年ノ犯罪法典ハ全時ニ刑法治罪法ヲ
俟備ヤリ而シテ之ヲ分ケニ大部トナス第一ハ
犯罪ニ関シ第二ハ警察法ノ至重ナル註違ニ関
ヤリ又其各大部ヲ分ケニ種トナス一ハ刑罰ヲ
定立シ一ハ治罪法ヲ設立セリ

司法省

千八百三年ノ該法典ハ治罪ノ部分ニ於テハ大
抵前百紀ノ際煥國ニ施行セシ所ノ規則ヲ取用
シ之ヲ擴充セシモノニ過キヌ何トアレハ該法
典ハ書面審査ヲ許シ傍聽ヲ禁シ裁判官ヲシテ
其職務ヲ以テ人ヲ拘留セシメ合法證據ノ規則
ヲ説立シ及ヒ陪審ノ設立ヲ拒止セリ
該法典ハ自由精神ヲ發揮スル者前後之ヲ駁撃
セシト雖モ治罪法ニ関スル部分ハ要重ナル墮
正ヲ加フルコトナク遂ニ千八百五十年ニ至ル
マテ之ヲ施行セリ然ルニ千八百四十八年三月
ノ政治沿革ハ大ニ民心ヲ誘進シ其極出板判決
ノ爲メニ陪審ヲ設立スルニ至リ尋テ千八百四
十九年八月四日ノ帝王憲法ニ迨テ(第百三條)面

審公議ノ主義及ヒ訴訟主義ヲ公告シ依セラ重
大ナル犯罪ニ就テハ陪審ヲ設立スヘキヲ約定
セリ

即チ千八百五十年一月十七日ノ法典ハ此約定
ヲ完終セシモノナリ

千八百五十年ノ法典ハ緊重ナル部分ニ於テハ
日耳曼諸國當時ノ法典ノ如ク千八百八年ノ佛
國治罪法ニ依憑セリ

嗣後千八百五十一年ヨリ漸次ニ論者ノ注目セ
シ改革ヲ該治罪法上ニ別致セリ即チ千八百五
十一年十二月三十一日ノ法律ハ帝國全土ノ爲
メニ新治罪法ヲ開設シテ僅カニ其一部ノミヲ
千八百五十年ノ法典ニ依憑スヘキヲ公告セリ

司法省

而シテ千八百五十三年七月二十九日布告セル
新法典ハ千八百七十四年一月一日ニ至ル迄之
ヲ施行セリ

然レモ千八百五十三年ノ法典ハ反テ千八百三
年ノ法典ニ退復シ千八百五十年ノ法典中ニ施
行セシ闕進ヲ放棄セント曰フモ過言ニ非サル
ナリ蓋シ該法典ハ面審公議ヲ許可セシト雖モ
其公告諸項ヲ短縮セリ又法律ヲ以テ法庭ニ入
ルヲ許スヘキ人ヲ定指セリ(第二百二十三條)而
シテ其他ノ者ノ出庭ヲ許スハ裁判長ノ所見ニ
依リ壯年男夫ニ限ルトセリ

該法典ハ千八百三年ノ法典ノ規則ニ全復スル
ニ非スト雖モ合法證據ノ主義ヲ取用セリ蓋シ

裁判官ハ被審人ノ事實ヲ證示セシモノト確認
スヘキノ場合ヲ定指セスト雖モ科刑ニ就テ要
用ナル證據ノ最少ナル局限ヲ定示セリ
該典ハ全ク陪審ヲ廢止セリ假令出版犯罪ニ於
テストモ亦之ヲ停メリ而シテ千八百三年ノ法
典ニ及シテ被審人ニ許スニ防護人ヲ以テスル
ト雖モ唯ノ審理結終ノ後ニ非サレハ之ヲ用フ
ルヲ許サ、リキ

第二章 千八百七十三年ノ法典編成沿革
千八百六十年及ヒ千八百六十一年ノ伊國戰爭
ヨリノ後自由精神ノ發動シ及ヒ大ニ憲法ヲ改
革セシヨリ世人ヲシテ刑罪法ノ過謬就中最モ
治罪ノ錯誤ヲ猛省セシメタリレイヌケラ、ル

司法省

ノ民撰議院ハ千八百六十一年及ヒ千八百六十
二年ニ於テ屢々刑事審理ノ改革及ヒ陪審法ノ
設立ヲ爲スノ緊要ナルコトヲ證示セリ初議皆
テ謂ラク此目的ヲ達スルノ方法ハ千八百五十
年ノ法典ヲ回復スルニ如カスト然レモ日ナラ
スレテ此議案ヲ放棄セリ蓋シ千八百五十年ノ
法典ハ大ニ補充スヘキ缺典アリ又改釐スヘキ
過謬多シ元來佛國ノ法典ヲ模倣セシモノナル
ヲ以テ日且曼ノ刑法學ハ漸次該法典ノ精神思
惟ヲ駁評スルニ至レリ是ニ於テ論者ハ千八百
五十年ノ法典ヲ以テ徒ニ改定法ノ基礎トスヘ
キノ議ヲ決セリ尋テ委員ヲ司法省内ニ置キ千
八百六十一年新法ノ草案ヲ起シ今年十一月之

ヲ編成シ議院ノ委員ノ評議ニ供セリ當時内閣
ノ更變アルニ會シ其事中絶ス千八百六十三年
ニ至テ再ヒ之ヲ着手シ今年ノ春既ニ全備ノ法
案ヲ刊行セリ然レモ之ヲ真ニレイケヌラトテ
議院ニ致セシハ千八百六十五年ノ帝王ノ特
法業モ亦種々更正ヲ加ヘタリ千八百六十七年
十一月二十八日ニ至テ遂ニ之ヲレイケヌラト
シノ民撰議院ニ送致セリ議院ハ之ヲ主任委員
ニ致シ委員等ハ七十二回ノ議會ヲ經テ始メテ
千八百六十九年十月二十六日ノ報告書ヲ議院
ニ陳呈スルヲ得タリ該委員ノ法案ハ種々緊重
ノ各項ニ就テ政府ノ法案ト所見ヲ異ニスル所

司法省

多シ民撰議院解散ノ期既ニ迫ルヲ以テ之ヲ討
論スルヲ得シテ千八百七十二年ニ至ツテ遂
ニ此論題ヲ復議セリ
千八百六十七年十一月政府此法案ヲ議院ニ致
セシ以來至重ナル事件ヲ生出セリ蓋シ千八百
六十七年十二月二十一日ノ司法權ニ関スル帝
國ノ憲法ハ第十條及ヒ第十一條ヲ以テ墮國治
罪法ノ基由タルヘキ主義ヲ設立セリ此二條ノ
首趣則チ左ノ如シ
第十條裁判官ノ前ニ於テスル公審ハ民事刑
事ヲ論セス凡テ面質ヲ以テシ衆庶ノ傍聽ヲ
許ス但シ法律ヲ以テ特別ノ場合ヲ定示スル
ハ此限ニ在ラス刑事審理ニ就テハ訴訟ノ

方法ヲ施用スヘシ

第十一條重刑ヲ科スヘキ犯罪(但シ法律ヲ以テ之ヲ定ム)輕重國事犯及ヒ出版ヨリ生スル輕重犯罪ハ陪審ヲ設置シテ其罪ノ有無ヲ決スヘシ

千八百六十九年三月九日ノ法律ハ半ハ此主義ヲ實施シテ出版犯罪ノ爲メニ陪審法ヲ設立セ

リ
千八百七十二年二月十六日司法卿ガラゼール

氏ハ治罪法ノ法案ヲ民撰議院ニ送致セリ蓋シテガラゼール氏ハ法案ノ編輯ニ任セレ諸委員ノ

報告者トナリテ極テ當初編纂ニ盡力セリ該法案ハ大ニ千八百六十九年ノ民撰議院委員ノ法

司法省

案ニ類似セリ然レモ亦緊重ナル一事項ニ就テ相異ナル所ナリ蓋シテ千八百六十七年及ヒ千八

百六十九年ノ法案ハ當時民撰議院ニ送致セシ刑法ニ符合スルト雖モ千八百七十二年ノ法案

ハ毫モ刑法ノ法案ニ符合セサリキ而シテ刑法ノ法案ハ先ツ停止セラレタリ之レカ爲メニ新

治罪法ハ千八百七十二年三月十一日ニ民撰議院ノ許可スル所トナリ千八百七十二年六月六

日之ヲ貴族院ニ致シ該院ハ千八百七十三年ノ初メニ之ヲ投票セリ尋テ千八百七十三年五月

二十三日帝王ノ允許ヲ受ケ因テ千八百七十三年六月三十日帝國法律誌ニ公載シ以テ六箇月

ヲ經テ即チ千八百七十四年一月一日ヨリ全國

必行ノ法ト爲セリ且ツ全時ニ治罪法ニ附加ス
ハキニ種ノ法律ヲ允可公告セリ即チ陪審人名
簿編成法陪審停止法是ナリ

第三章 新治罪法ノ要畧

千八百七十三年ノ法典ハ司法權上ノ法律第十
條及ヒ第十一條ニ定示セル大主義ヲ盡ク實施
セリト云フハシ此大主義トハ即チ訴訟吟味公
然及ヒ面質吟味ノ主義及ヒ千八百六十九年ヨ
リ起立セル陪審ノ編制是レナリ此等ノ主義ハ
固ヨリ新奇ノモノニアラス何ヲ以テ之ヲ言フ
トナラハ千八百五十年ノ煥國法典及ヒ最前千
八百八年ノ佛國法典中ニ既ニ之ヲ掲載シタリ
キ然レモ千八百七十三年今ノ法典中殊ニ天理

司法省

ニ吻合シテ最モ著シルンキモノハ右ノ主義ヨ
リ脱胎セル好結果トス實ニ煥國立法家ハ其識
認セル方法ノ讚嘆ヲ受クルモ元當ナルコトヲ
自ラ感覺セルカ如シ如何トナレハ立法家ハ民
撰議院ニ致セル報告書中若クハ討論ノ際ニ在
テモ屢千八百五十年ノ法典及ヒ佛國法典ヲ論
難スルニ其確定セル根柢ノ主義ニ就テ至理適
當ノ趣旨ヲ引出セサリシヲ以テセリ
新治罪法ハ訴訟ノ主義ヲ許認セリ此主義ノ故
ヲ以テ裁判官ハ其職ヲ以テ犯罪ヲ摘發スルヲ
得スシテ訴訟人ヲシテ裁判官ニ犯罪ヲ審理セ
シムルヲ得セルメタリ日耳曼ニ於テ此意趣ヲ
短簡ニ説明セル諺語アリ「訴訟人アラサル地ニ

ハ裁判官アルヲナシ

此主義ヲ施行セシキハ千八百七十三年ノ英國法典
ハ二種ノ要點ニ就テ又大ニ注目スヘキモノアリ
第一ハ訴訟權ヲ附與スヘキモノ第二ハ立法

家訴訟權ヨリ生出セレ趣旨是レナリ
新治罪法ニ拠レハ檢事ハ訴訟ノ專權ヲ有セス
則テ許多ノ場合ニ於テ(第四十六條)及其次條
被告人自カラ之ヲ保持スルヲ得

註遺及ヒ輕罪ニ就テハ被害人ノ稟訴ニ依ラサ
レハ檢事ノ專斷ヲ以テ糾問セサルモノ多シ又
被害人ハ間接ニ訴訟ヲ爲スコトナリ直ニ刑事
裁判所(第四十六條)ニ之ヲ致スコトヲ得ヘシ
千八百五十年及ヒ千八百五十三年ノ法典モ亦

司法省

右ノ場合ニ在テハ被害人ノ訴訟權利ヲ許可セ
リ然レニ輕罪ニ係ルキハ被害人ハ先ツ檢事ニ
稟告シ檢事之ヲ拒絕セシニ非サルヨリハ此權
利ヲ施用スルヲ得ス而シテ千八百七十三年ノ
法典ハ檢事ノ拒絕ヲ待ツテ要セス
又後取原告人ト稱スルモノヲ許可セシハ最モ
緊重ナルノ改革ナリ

蓋シ檢事ハ一タヒ訴訟ヲ爲セレ後テ復々之ヲ
放棄スルヲ得然ルキハ裁判所ハ其審理ヲ停止
セサルヲ得ス然ルニ千八百七十三年ノ法典ハ
民事原告人ヲレテ後承原告人ノ名稱ヲ以テ犯
罪ノ種類如何ヲ問ハス檢事ニ承テ訴訟ヲ保續
シ刑罰ヲ請求スルコトヲ得セシム(第四十八條)

煥國立法家ハ後承原告人ノ方法ハ亦弊害ヲ生
ゼンコトヲ疑懼セリ何ントナレハ檢事訴訟ヲ
放棄セシニ因テ原告人ハ多少ノ損害ヲ受ケシ
ヲ以テ其再訴ハ裁判官抑制ノ憂ハ無キニシモ
アラス故ニ成ル丈ケ之ヲ豫防セシカ爲メニ千
八百七十三年ノ法典ハ當初ノ審理ヲ經スレテ
直クニ裁判所ニ訴訟ヲ爲スコトヲ民事原告人
ニ禁止シ且ツ社會ノ利益ヲ妨害スヘキヲ防ク
カ爲メニ檢事ヲ以テ後來訴訟ノ施行ヲ監督セ
シメ若シ本人復々之ヲ放棄セレバハ檢事之ヲ
主任スルヲ得ヘシ(第四十九條)

司法省

一ナリ若シ檢事若クハ原告人ハ審理裁判官又
ハ裁判所ニ訴訟ヲ爲セシ後々復々之ヲ放棄セ
シ中ハ裁判官又ハ裁判所其審査ヲ廢止スルヲ
要ス

審理中訴訟ヲ放棄シテ裁判所ノ審査ヲ廢止セ
シムルノ權利ハ實ハ原告人ニ至重ナル權勢ヲ
附加セリト爲スヘシ又訴訟主義ニ依テ他ノ一
改革ヲ爲シ審理及ヒ吟味ノ結終ニ就キ原告人
ニ最上ノ權利ヲ附與セリ何ソヤ蓋シ千八百五
十年及ヒ千八百五十三年ノ法典ニ於テハ審理
裁判官ノ決議(事件送致ノ決議)ヲ以テ裁判所ノ
判決ヲ要セシト雖モ此法典ハ原告人ヲシテ其
編輯スル所ノ訴訟書ヲ直クニ裁判所ニ呈致シ

判決ヲ請求セシム(第二百七條及ヒ其次條)何ト
ナレハ立法家ハ原告人訴訟ノ本主タルカ故ニ
其訴訟ヲシテ當初司法決議ニ附属セシムルハ
至理ニ合ハスト思惟セリ而シテ其事件送致ノ
決議ヲ廢止セシハ徒ニ理ニ合ハサルノミニ非
ス立法家ハ之ヲ以テ彼ノ裁判所ニ被審人ヲ送
致スヘキ司法ノ決議ヨリ生出シ易キ犯人ノ損
害ヲ豫防スヘト思惟セシナリ

然レハ原告ノ訴訟書ハ未タ確定ノ性質ヲ有セ
シモノト爲サス而シテ被審人ハ此訴訟ニ對シ
テ抗禦ヲ爲スヲ得ヘシ(第二百八條及ヒ其次
條)而シテ其抗禦ノ理不理ヲ檢査スル所ノ控訴
院ハ訴訟狀ヲ認定レ或ハ其事項ヲ取捨シ或ハ

司法省

全ク訴訟狀ヲ放棄スルヲ得ヘシ則チ第一第二
ノ場合ニ在テハ控訴院ノ議ヲ以テ訴訟事件ヲ
裁判所ニ送致シテ審理ヲ爲サシム然レハ立法
家ハ被審人ノ損害(直接又ハ間接ニ生スル)ヲ豫
防センコトヲ猛省セリ何トナレハ抗禦ヲ選卻
シ訴訟狀ヲ確認セシ所ノ判決ヲ法庭ニ於テ公
然朗讀スルヲ許サス但其判決部分中ノ訴訟狀
中ノ事項ヲ放棄セシヲ以テ犯人ノ利益ニ関セ
レモノニ限り之ヲ明讀セシム(第二百四十四條)
訴訟狀ハ法庭ニ於テ公然之ヲ朗讀スルヲ法ト
ス然レハ証人ノ思惟上ニ多少ノ感覺ヲ與ヘ
ンコトヲ恐ルカ故ニ證據人退出セシ後チニ非
サレハ之ヲ朗讀スルヲ許サス(第二百四十四條)

防護人ノ輔佐ヲ受クヘキ被審人ノ權利ハ訴訟
主義ニ在テハ殆ト己ムヘカラサルノ要旨ナリ
何トナレハ原告人アリテ防護人ナキハ糾問
ト防護トノ間ニ不權衡ヲ生スルヲ以テ之ヲ防
ツカ爲メニ防護人ヲ具備セシムルハ勿論適理
ト云フヘキナリ

是故ニ千八百七十三年ノ法典ハ被審人ニ許ス
ニ防護人ヲ採用スルヲ以テシ又重罪裁判院ノ
審理ニ係ル犯罪ハ官必ス防護人一名ヲ附與ス
ルヲ要セリ其防護ニ関セシ法典ノ成規中最モ
注目スヘキモノハ防護權利ヲ審理後ニ附與ス
ルノミナラスレテ審理中ニ於テモ亦之ヲ許可
セシ一年ナリ最モ防護人ハ審理ノ際ニ方テ被

司 法 省

審ノ糾問ヲ傍聽スルヲ得ス(第九十七條)ト雖モ
法庭外ニ在テハ常ニ被審人ニ忠告ヲ爲シ教諭
スルコトヲ得且ツ法典ハ特ニ防護人ニ附與ス
ルニ審理ノ書類ヲ見知スルコトノ權利ヲ以テ
セリ(第九十五條)是レ皆テ立法家ノ審理中ニ於
テモ亦訴訟審理ノ主義ヲ施用セシテ顯明證示
スルニ足ルヘシ

又被審人欠席ノ際裁判ヲ爲スヲ許スハ特別ノ
場合ニ限ルトス而シテ其甚々稀少ナルハ蓋シ亦
立法家カ防護權ヲ貴重セシ所以ナリ法典ノ真
意ヲ推測スルニ被審人ヲ問質セシテ之ヲ刑
ニ處スヘカラサルナリ但、裁判所ノ呼喚ニ從順
セサル者ヲ罰スルハ理ノ當レルナリ乃ケ千八

百七十三年ノ法典モ亦斯ノ如キ者ニ對シテ民
權ヲ剝奪セリ然リト雖モ司法ノ命令ニ遠及セ
レテ以テ犯人ヲ質問セス防護ヲ爲スヲ得サル
ノ前ニ於テ之ニ犯罪ノ刑ヲ科スルハ豈ニ之ヲ
適理ト謂フヘケンヤ

摺國法典ハ糾問開始ニ至ルマテ訴訟ヲ保持ス
ルヲ許可セリ然レトモ五年以内ノ自由剝奪刑
ヲ科スヘキ輕犯罪ニ非サルヨリハ糾問着手後
判決ニ至ルマテ訴訟ヲ保續スルヲ得ス此場合
ニ在ルト雖モ犯人自ラ呼喚狀ヲ受ケ檢事ヨリ
判決ニ至ルマテ訴訟ヲ保續セシムコトヲ請求ス
ルヲ要ス且ツ主任ノ裁判院ハ犯人不在ヲ以テ
事實ヲ發見スルヲ得スト認ムルハ何時ニテ

司法省

モ審理ヲ停止スルノ權ヲ有ス(第四百二十七條)
千八百七十三年ノ法典中ニ公庭審理ノ主義ヲ
取用セシハ則チ千八百五十年ノ法典ニ復歸セ
シナリ蓋シ千八百三年ノ法典ハ秘密審理ヲ許
諾シ千八百五十三年ノ法典ハ稍々公庭審理ヲ
許可セシト雖モ其分限甚々狭小ナリキ然ルニ
新法典ハ其分限ヲ開放シテ全ク公庭審理ヲ許
可セリ

又千八百七十三年ノ法典ハ面質ノ主義ヲ布告
セリ此主義ハ既ニ千八百五十年及ヒ千八百五
十三年ノ法典ヲ以テ之ヲ許可セリト雖モ千八
百七十三年ノ立法家ノ所見ニ據レハ旧法典ハ
此主義ニ就テ緊要ナル至理ヲ發出セサリレト

思惟セリ

審理ハ多ク記載ヲ以テ成立スルカ故ニ面質公
議ヲ以テ主トスルニ至テハ裁判上第二ノ地位
ニ降レリ而シテ陪審ニ關スル犯罪事件ニ非ナ
ルヨリハ其要用見ス故ヲ以テ裁判官ハ其審理
ノ事件ニ拘泥セシテ殊ニ公審中經驗セシ事
ヲ猛省セラルヘカラス具拘泥ノ害ヲ防クカ爲
メニ審理證據人ノ調書ハ法律ニ特定セル場合
第二百五十二條ニ非サルヨリハ法庭ニ於テ之
ヲ朗讀スルヲ得ス

司法省

ハキ所以アリ何トナレハ積年日耳曼諸國ニ於
テ討論セシ一大問題ヲ撰國治罪法草案ニ依テ
結終スルヲ得タレハナリ

撰國ノ法典ハ控訴ヲ爲スヘキ場合ノ數ヲ減省シ
唯々刑罰及ヒ民事利益ニ就テノミ之ヲ爲スヲ
許可セリ而シテ有罪ノ問題ハ控訴ヲ爲スヲ許
サス即チ處刑人ハ控訴院ニ就テ放免ヲ受ケル
ノ控訴ヲ爲スヲ得ス檢事モ亦初告裁判院ニ於
テ放免ヲ受ケタル犯人ニ刑ヲ科センカ爲メニ
控訴ヲ爲スヲ得ス

立法家ハ有罪問題ノ控訴ハ面質審査ノ主義ニ
反違スト思惟セリ
蓋シ裁判官ノ事件ヲ認定スルハ眼前ノ證據ニ

按拠スルヲ要ス故ニ若シ有罪ノ控訴ヲ許スハ
ハ控訴判事ハ自ラ直クニ問質スル所ヲ以テ判
決スルヲ得スシテ審理裁判官ノ問質セシ所ニ
基テ決議ヲ為サ、ルヲ得ス從テ初告院ニ陳呈
セシ證拠人ノ陳述書ニ控訴判決ノ際緊重ノ用
ヲ為スヘシ然ラハ大約書面審査ノ方法ニ復選
スルト謂フモ不可ナルナレ勿論控訴判事ハ再
タヒ證拠人ヲ問質スルヲ得ルト雖モ斯ノ如キ
ハ控訴ノ審理逐次ニ延滞シ而シテ多少ノ費
用ヲ要スルノ害アルハレ
且有罪ノ控訴ハ換國ニ於テ許可セシ證據法ト
相矛盾スル所アルハ立法家ノ注目セシ所ナリ
若シ合法証拠ノ方法ヲ許用スルハ有罪ノ問

司法省

題ハ即チ裁判官權利ノ問題トナリ法律ノ成規
ニ照準シテ刑ヲ科スル為メニ要用ナル合法證
拠アルヤ否ヲ檢探スルヲ要ス然ルハ有罪ノ
控訴ヲ許可スルニ理ナキニ非ルナリ何トナレ
ハ控訴裁判官ハ輒ク法律請求スル所ノ證拠ア
ルヤ否ヲ發見スルヲ得ヘシ然レハ裁判官其感
覺心ヲ以テ決議スルノ自由ヲ有スルハ有罪
ノ問題ハ即チ事實上ノ問題トナリ控訴判事ハ
初告裁判所ノ感覺ノ原由ヲ分明識ルコト能ハ
サル可シ右ノ如クナルカ故ニ合法証拠ノ方法
ニ於テハ立法家ハ權利ノ問題即チ有罪ノ問題
ヲ判決スルニ就テ控訴判事ニ信憑ヲ置クト雖
モ論者素ヨリ之ヲ非トナリス然レハ全ク判事

ノ思惟ニ委任スル所ノ事實ノ問題ニ至テ控訴
判事ニ上位ヲ與フルハ吾輩以テ理アリトナサ
ルナリ若シ此事實問題ノ判決スルニ就テ初
告判事ハ十分倍スルニ足ラストセハ司法ノ組
立及ヒ判事投任ノ方法ノ改革ヲ冀望セサル可
ラスレイス左ノ議院ニ於テモ上ニ関列
セル諸考案ハ控訴ノ問題ニ就テ討論ヲ盡セシ
モノタリ

余輩ノ陳述シタル所ノ控訴權ノ減縮ハ註違罪
ニ就テハ之ヲ用フルヲ得ス蓋シ註違罪ハ地方
裁判所ノ一名判事ノ判決ニ係ルヲ以テ犯人ヲ
保護スルニ充分編普ナラス故ヲ以テ立法家ハ
其保護ヲ補充セシカ爲メニ控訴ヲ許可セシナ

司 法 省

リ是ヲ以テ註違ニ就ラハ有罪控訴モ亦其許可
スル所トナリ其施行ノ場合ハ佛國ノ法典ニ於
ケルヨリモ一倍之ヲ拓張セリ何トナレハ墺國
ノ立法家ハ註違罪ニ就テハ何刑ヨリ以下ハ之
ヲ控訴スヘカラスト定言セサリキ(第四百六十

四 條)

地方裁判所ノ判決ニ對スル控訴ト他ノ裁判所
ノ判決ニ對スル控訴トノ分別ハ立法家ヲシテ
復々自ラ他ノ分別ヲ起立セシムルニ至ル即テ
一體ノ控訴ヲ判決スルハ公知ヲ要セスト雖モ
地方裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ限リ必ス公
然之ヲ判決セサルヘカラス(第四百七十二條)
控訴ノ原由ハ墺國治罪法ニ於テ佛國法典ヨリ

減少ナリト雖モ他ノ一點ニ於テハ佛國千八百
八年ノ治罪法ヨリ墺國法典ハ一層寛大ナルモ
ノアリ蓋シ佛國ノ法典ハ重罪裁判院ノ決議ニ
對シテ控訴ヲ爲スヲ許サ、レトモ墺國ニ在テ
ハ初告裁判院ノ判決ヲ控訴シ得可キ場合ニ在
テハ重罪裁判院ノ判決ト雖モ亦之ヲ控訴スル
コトヲ得セシム(第三百四十五條)
控訴ハ之ヲ控訴院ニ陳呈スルヲ得此目點ニ就
テ立法家ノ千八百五十年ノ法典ヲ用ヒサリシ
原因ハ之ヲ推測スルニ難カラサルナク第一ニ
重罪裁判院ノ決議ト裁判官ノミヲ以テ成立セ
ル他ノ裁判所ノ判決トフ分別スルノ理ナカ
ルヘレ何トナレハ他ノ裁判所ト雖モ合法証拠ノ

司法省

方法ニ拘泥スルコトナク自己ノ感覺心ニ拠テ
決議ヲ爲スニ非スヤ且ツ初告裁判院ノ決議ノ
控訴ヲ許可レ而シテ反テ重刑ヲ科スヘキ所ノ
重罪裁判院ノ決議ノ控訴ヲ許可セサルハ條理
轉倒セレモノナラン蓋シ立法家此ニ見ルコト
アル歟
墺國法典ハ控訴ノ外上訴ノ方法中ニ破毀上告并
ニ再審ヲ許可セリ但シ此再審ハ我國ノ再審願
許ニ稍類似スル所アリ吾輩後ニ之ヲ説明セン
トス
破毀上告ニ就テハ上告ヲ受クル所ノ破毀裁判
院ノ權限ハ墺國ニ在ラハ佛國ニ於ケルヨリハ
廣大ナルコトヲ注目セサルヘカラス蓋シ佛國

ニ在ラハ大審院上告ニ係ル判決ヲ破毀セレハ
ハ自ラ其事件ヲ審理セヌシテ之ヲ他ノ一裁判
所ニ送致セサルヘカラス埃國立法家ハ乃ケ謂
ヘラクス如クナルハ大審院ハ有名無實ノ
職務ヲ有シ之カ為メニ多少ノ繁雜及ヒ遲滞ヲ
生スヘレト故ニ立法家ハ大審院ニ附典スルニ
上告ニ係ル決議ヲ破毀セレ後ハ事宜ニ因テ自
ラ其判決ヲ擔任スルノ權利ヲ以テセリ(第二百
八十八條第四項)

司法省

場合ニ於テ請求スル所ノ審査ヲ還復スレヲ謂
フナリ乃ケ再審ハ全ク上訴ノ性質ヲ有スルモ
ノニ非ス何トナレハ再審ヲ為スハ未タ司法判
決ヲ為サ、ルノ前ニ在レハナリ然レモ判決後
更ニ事實ヲ發見シ若クハ證據アルニ由テ一旦
最後ノ判決ニ係ル所ノモノヲ重複スルコトノ
上訴ノ方法ヲ稱シテ亦刑事再審ト謂フ此上訴
ノ方法ハ既ニ千八百五十年及ヒ千八百五十三
年ノ法典ニ由テ之カ規則ヲ立テタリト雖モ千
八百七十三年ノ法典ハ一倍廣大ナル方法ニ就
テ之ヲ擴張セリ則チ之ヲ為スヘキノ場合ハ甚
タ多數ニシテ最後判決ノ權威ノ主義ハ殆ント
狭小ノ分限内ニ退縮セシカ如ク然リ

再審ハ犯人ノ利益ノ為メ(第三百五十三條第三
百五十五條及ヒ第三百五十六條)又ハ其損害ノ
為メ若クハ犯人ヲ放免セシムル為メ若クハ犯
人ニ輕減ノ刑ヲ科セシムル為メ又ハ放免ニ係リ
レ被審人ニ科刑セシムル為メ又ハ一層ノ重刑
ヲ宣告セシムル為メ(第三百五十三條及ヒ其次
條)凡テ之ヲ為スヲ得ヘシ立法家ハ社會ノ安寧
法理ハ有罪ヲ刑シ無罪ヲ放免スヘキヲ要求ス
ルヲ以テ犯人ノ利益ノ為メ再審ヲ許スハ亦
犯人ノ損害ノ為メニモ之ヲ許用スルハ固ヨリ
正理ニシテ至要ナリト思惟ヤシナリ
凡ソ上訴ハ法典ニ定示セル期限内ニ非サレハ
之ヲ為スヲ得ス然レモ新法典ハ定期内ニ其權

司 法 省

利ヲ施用セサリシ犯人ニ特別ノ恩典ヲ附與ス
ルヲ得セシメタリ蓋シ此恩典ハ回來ノ法律ニ
掲載セサリシモノナリ即ケ既滿期限ノ還與ヲ
本件ノ上訴擔任ノ裁判所ニ請願スルヲ得ル是
レナリ此請願ヲ為スニハ暫クモ停止スヘカラ
サル事故アリテ之カ為メニ上訴ノ期限ヲ顧ミ
ルヲ得サリシヲ確證セサルヘカラス(第三百六
十四條)
陪審ノ組立ハ五章ノ說明セシ如ク新法典ノ基
礎中ノ一タリ然レモ陪審ノ規則ハ新法典中ニ
之ヲ掲明セシテ特リ重罪裁判院ノ審理規則
ヲ開列セシノミ陪審ヲ呼喚シテ判決ヲ為サシ
ムヘキ犯罪ハ新法典施行上ノ法律中ニ之ヲ定

示セリ此法律ハ治罪法ト同日ニ(千八百七十三年五月二十三日)布告シ陪審人名簿編成ノ方法ヲ定立セリ又同時ニ布告セシ他ノ法律ヲ以テ陪審臨時停止ノ事ヲ定メタリ

陪審裁判ノ規則ハ多クハ我國法典ノ規則ニ類似セリ就中數種ノ事項ハ全ク換國治罪法新設セシモ、世人ヲシテ注目セシムヘキ成規アリ公審終結及ヒ裁判院長ノ要略陳述ノ後ニ於テ疑問ヲ陪審人ニ付援スルノ：ナラス檢事請求及ヒ防護人答辨ヲ為サ、ル前ト雖モ(第三百十六條)證拠人及ヒ鑑定人ノ陳述ヲ終ルハ直クニ疑問ヲ陪審人ニ為スヲ得ヘシ立法家ハ斯ノ如クシテ豫メ公審ノ分界ヲ定示センコトヲ企

司法省

望セリ此事項ニ就テハ換國法典ノ成規ト羅馬ノ規則裁判トノ間ニ稍々相類似スル所アリ何トナレハ羅馬ニ在テハ裁判長ノ付下セシ規則ヲ以テ公審ノ分界及ヒ判事ノ權限ヲ豫定セシナリ

院長ノ要略陳述ハ新法典モ亦之ヲ保存セリ然レニ院長ハ徒ニ公審ヲ要述スルニ止マラス且ツ訴訟事件ノ法律上ノ種類ヲ陪審人ニ指示シ供セテ疑問中ノ法語ノ意味ヲ説明スルヲ要ス(第三百二十五條)院長ノ指示ハ原告若クハ被告ノ請ニ由テ調書中ニ登記セサルヘカラス何トナレハ指示中ノ誤謬ハ後日破毀上告ノ原因タレハナリ(第三百四十四條第八項)

裁判長法庭ニ於テ上項ノ如ク説明ヲ為スト雖
モ尚ホ陪審人之ヲ明瞭ニ理解セサル事項アル
トハ裁判長ニ陪審評議室ニ於テ再ヒ精要ノ説
明ヲ為サンコトヲ請求スルヲ得ヘシ然ルキハ
院長ハ書記官及ヒ原被両造(裁判所内ニ在ルキ
ハ)ヲ同伴スルヲ要ス(第三百二十七條)原告人及
ヒ被告人ノ此席ニ參會スルハ實ニ一大要件ト
謂フヘシ何トナレハ院長陪審人ニ附典スル所
ノ説明中ニ疑審誤謬アルハ原被之ヲ摘發シ調
書中ニ之ヲ登記センコトヲ請求スルヲ得ヘシ
而シテ此際生出セレ誤謬モ亦院長ノ法廷ニ於
ケル誤謬ト同ク破毀上告ノ原因タルヘシ(第三
百二十七條)

司法省

陪審人ノ確認ノ如何ヲ論セス裁判院ハ之ニ續
テ必ス決議ヲ為スヲ要ス(摺國治罪法ハ放免ノ
宣告ハ必ス裁判院ノ決議書ヲ以テスルヲ要シ
院長ノ辞令書ヲ以テスルヲ得)(第三百三十四條)
此決議書ハ有罪不刑ノ決議ノ如ク之カ破毀上
告ヲ為スヲ許ス
陪審人ノ權限ハ治罪法施行上ノ法律特別ノ方
法ヲ以テ之ヲ決定セリ此法律ハ出板ヨリ生ス
ル輕重犯罪ハ一切陪審ヲ設立シテ裁判ヲ為ス
ヘキヲ確定セリ然レトモ輕重國事犯及ヒ普通
犯罪ノ陪審裁判ヲ要スルモノハ其種類ヲ開列
セリ立法家ハ千八百六十七年十二月二十一日
ノ憲法中司法權ニ関セシ第十一條ニ陪審ハ輕

重犯罪ノ最重ナルモノ、爲メニ設立スト云ヘ
ル主義ニ靠着セリ但シ最重ノ刑トハ禁獄五年
以上ノ刑ヲ謂フ勿論犯罪中ニ五年以上ノ禁獄
ニ係ル者アリ五年以内ノ禁獄ニ係ル者アルヲ
以テ立法家ハ訴狀中ニ禁獄五年以上(五年ヲ含
蓄ス)ノ刑ヲ要求セシ犯罪ニ非サレハ陪審ヲ權
限内ニ在ラスト論定セリ(治罪法施行上ノ法律

第六條

陪審人名簿編成ノ方法ハ千八百七十三年五月
二十三日ノ法律ヲ以テ之ヲ定制セリ此法律ノ
布告ハ治罪法ト日ヲ同フセシト雖モ治罪法ニ
先タケテ之ヲ施行セリ即ケ布告本日ヨリ千八
百六十九年三月九日ノ法律ニ依テ出版犯罪ヲ

司法省

擔任スヘキ陪審ニ就テ之ヲ施行セシメタリ
該法律ハ第一ニ陪審人タルヲ得ル爲メニ具備
スヘキ要用ナル性質方法ヲ揭示セリ
法律第一條ヲ見ルニ陪審人タルニ要用ナル事
項ヲ掲クル左ノ如シ 一 齡滿三十年以上ナル
コト 一 レイスチエラチエノ民撰議院代議士ヲ
出セシ諸國ノ人民タル權利ヲ有スルコト 一
滿一年以上該區ニ住居セシ者 一 人口三萬以
下ノ區ニ在テハ直税十フロラン以上ヲ出スニ
堪ヘタル者其他ノ區ニ在テハ二十フロラン以
上ヲ出スニ堪ヘタル者但シ代言人代書人大中
學校ノ教師公立大學校ノ博士タル者ハ定税ヲ
納メサルモ亦陪審人タルヲ得ヘシ

又陪審人タルノ權ヲ失スルモノヲ揭示セルコ
ト左ノ如シ 一 身体又ハ精神ノ恒疾アリテ其
職ニ堪ヘサル者 一 全ク民權ヲ有セサルモノ
一 司法官具負債者タルヲ公告セシ者(即チコ
ンキユスヘルフレシ) 一 身代限ノ一種ニ係ル者ハ其
結尾ニ至ルマテ又身代限ノ商人ハ千八百六十
八年十二月二十五日ノ法律第二百四十六條ニ
依テ定示セル權利ヲ回復スルニ至ルマテ 一
審理ニ係リ糾問ヲ受ケ或ハ刑罰ニ處セラレモ
ノ 一 處刑ニ罹リテ其撰舉權ヲ剥奪サレシモ
ノ 但シ復権ヲ受ルヤハ此限ニ在ラス
陪審ノ職ヲ兼務スルニ故障アルモノ左ノ如シ
一 在職ノ諸官吏 一 海陸軍人及ビ在職ノ國

司法省

民軍若クハ不在職タリトモ給料ヲ受ケラ家居
スル者 一 軍務ニ関スル屬吏 一 教導職及ビ
官ノ許可ヲ受ケタル宗教會社ノ役僧 一 小学
校教師 一 驛途鐵道傳信諸局若クハ漁船局ノ
屬吏
陪審ノ職ヲ除免スルモノ左ノ如シ 一 齡滿六
十年以上ノ者 一 邦會(帝國)内諸邦ノ公會ヲ云
フ帝國公會及ビ諸公會ノ代議士開會ノ間 一
假令在屯セスト雖モ軍務ニ充ツル者 一 帝室
ノ用ヲ務ムル者 一 公立學校ノ教師 一 内科
醫外科醫但シ藥舗主ハ區長ヨリ其主職ヲ要セ
シテ公告セシヤハ其翌年陪審ノ職ヲ除免ス
一 陪審若クハ陪審補ノ職ヲ一回全勤セシモノ

ハ翌年中之ヲ除ク

陪審人名簿中ニ本源名簿毎年名簿毎會名簿事
件名簿ノ別アリ注目セサルハカラス

區長ハ自ラ區會議員二名ヲ撰舉シ毎年十月ノ
初メニ區内ノ陪審人タル權ヲ有スル者ノ人名
簿ヲ編成ス此名簿ハ期日ヲ定メ之ヲ區務所ニ
貼示シテ其權利ヲ有スル者ヲシテ告訴ヲ爲ス
ヲ得ヌシム此告訴ハ之ヲ區長及ヒ區會議員二
名ヲ以テ結立スル所ノ委員局ニ呈致スルモノ
トス十月ヲ限リ改正ノ人名簿ヲ裁判區ノ長史
ニ送致シ其規則ニ及スル所アレハ長史ハ之ヲ
區長ニ指示シテ釐正ヲ爲サシム若シ區長障礙
アルキハ長史自ラ之ヲ釐正スヘシ而シテ裁判

司法省

區長史ハ其管内ノ陪審人名簿ニ其書類ヲ附シ
テ初告裁判院長ニ送致シ且ツ此人名簿中知識
徳義性質ノ篤實ナル剛毅ナル數種ノ國語ヲ解
スル等(數國ノ方語ヲ通用スル國ニ在テハ)最モ衆
ニ越ヘテ陪審ノ職ヲ勤ムルニ適當ナリト認定
スルモノヲ指示スヘシ

初告裁判院長ハ陪審人名簿ヲ拾集シ十一月中
ニ特別ノ委員ヲシテ管内ノ毎年名簿ヲ編成セ
サルハカラス此委員ハ初告裁判院長若クハ其
代理人及ヒ初告判事若クハ地方判事中ヨリ撰
舉セシ判事三名及ヒ人民ノ名望アルモノ三名
ヲ以テ之ヲ結立ス但シ此委員ハ初告裁判院長
皆之ヲ撰任ス委員長ハ其集會ヲ其國ノ政府ニ

報知シ政府ヲシテ代理人ヲ派遣スルヲ得セシ
△代理人ハ所見ヲ陳述スルヲ得ルト雖モ投票
ニ關スルヲ得ス

陪審人名簿ニ關シ告訴ヲ為スモノアルハ委員
之ヲ檢査シ尋テ陪審人毎年名簿及ヒ陪審補每
年名簿ヲ論定ス此名簿ヲ論定スルニ就テハ其
最モ陪審ニ適當セリト信認スル所ノ者ヲ撰拔
スルヲ要シ且ツ陪審補名簿ハ重罪裁判院所在地
ニ住居スル者ノミヲ取テ之ヲ編成スルヲ善シ
トス

出版犯罪ニ關スル千八百六十九年五月九日ノ
墺國法律ハ佛國ノ法律ト大ニ異ナル事項アリ
蓋シ墺國ニ在テハ名簿ニ記載スヘキ陪審人ノ

司法省

數ヲ定ムルハ佛國ノ如ク人口ニ原ツカスシテ
翌年ノ必須ナル數ヲ推測シテ之ヲ定ムル是レ
ナリ凡テ各人名簿ニ記載スヘキ陪審人ノ數ハ
平常及ヒ臨時集合ノ為メニ必須ト推測スヘキ
人負ノ一倍ト為ス
右ノ規則ヲ遵守シテ人名簿ヲ編成スルキハ人
員不足ヲ生スルコトアリ故ニ一裁判管内ノ人
名簿通計八百名ニ達セサルキハ初告裁判院長
其撰任セシ特別委員ノ集合セサルニ先タケ各
區長ニ命シテ追加名簿ヲ編成セシムルヲ要ス
而シテ追加名簿ニ記載スヘキモノハ直税五フ
ロラン以上ヲ納ムルモノヲ取ル最モ陪審人タ
ルニ緊要ナル事項ヲ具備スルヲ要ス

右ノ方法ニ依テ編成セシ毎年名簿ニ於テ又每
會名簿ヲ編成ス嘗テ民撰議院ニ送致セシ政府
ノ法案ハ每會名簿ニ亦毎年名簿ノ如ク特別委
員ヲ置テ之ヲ編成セシムヘシト云ヘリ然レモ
民撰議院ハ選撰法ヲ以テ每會名簿ヲ編成スル
中ハ自ラ陪審人ノ不羈ヲ妨碍スヘシト思惟セ
リ故ニ抽籤法ヲ以テ之ヲ編成スルニ決議セリ
陪審集會ノ前十五日初告裁判院ニ於テ判事二
名及ヒ檢事ノ參坐ニテ公然抽籤法ヲ行ヒ每會
名簿ヲ定メ又抽籤ノ時日ヲ代言人事務局ニ報
告シテ其社負一名ヲ派遣參會セシムルヲ得セ
シム

司法省

又各事件ニ就キ抽籤ヲ以テ陪審組ヲ結立ス其
方法規則ハ新法典中ニ之ヲ明載セリ(第三百四
條及ヒ其次條)
重罪裁判院ハ陪審人ヲ設ケルノミニ止マラス
且ツ佛國ノ如ク三名判事ヲ置ク重罪裁判院長
ハ大体控訴院長ヲ以テ之ニ任セレメス多クハ
重罪裁判院所在地ノ初告裁判院ノ長ヲ以テ之
ニ任ス(第三百二十一條)蓋シ立法家ハ裁判官ノ
移轉ヲ豫防セシナリ何トナレハ移轉ハ判事ヲシ
テ空シク時日ヲ曠過セシムルノ害アレハナリ
此方法ハ佛國ニ於テ各州ノ重罪裁判院ヲ管セ
シムルニ控訴院所在地ヲ除クノ外ハ該院ノ長
ヲ以テセシメテ重罪裁判院ノ設置地ノ民事裁
判所ノ長ヲ以テスルノ方法ニ應當スヘシ

司法省

重罪裁判院ノ判事ヲ三員ト定メタルハ最モ著
眼スヘキ要領ナリ何トナレハ陪審ノ權限ニ屬
セサル犯罪ヲ擔任スル初告裁判院ハ判事四員
ヲ以テ議ヲ決ス而シテ其所見相半スルハ犯
人ヲ放棄ス故ヲ以テ此判事ヲ四員トセシ偶數
ハ犯人ノ利益ノ為メニ之ヲ許可セシモノナリ
然レハ重罪院ノ如キハ陪審人アルハ判事ハ
罪ノ有無ヲ決スルモノニ非スレテ刑事ヲ擬定
スルヲ任スルカ故ニ立法家ハ投票ノ互半ヲ生
ゼシムヘカラスト思惟セリ
千八百七十三年ノ法典中ニ再ヒ陪審ノ結立ヲ
許可セシニ當リ民撰議院ハ後來具弊害アラシ
コトヲ慮リ之カ為メニ特別ノ法律ヲ投票決定
シ千八百七十三年五月二十三日新法典及ヒ陪
審人名簿編成ノ法律ト同時ニ之ヲ布告セリ此
新法ヲ號シテ陪審停止法律ト稱ス
陪審停止律ハ特別ニ定示セシ國內ニ於テ陪審
ノ權限ニ關スル諸犯罪若クハ唯數種ノ犯罪ニ
就テ陪審ノ實施ヲ停止セシムルモノナリ但シ
此停止ハ一ケ年ヲ越エルヲ許サス
陪審停止ヲ為スヘキ場合アルハ各省ノ卿會
合シテ大審院ノ所見ヲ問質シ然ル後之ヲ公告
スヘシ但シ諸卿其責ニ任ス行法權ニ斯ノ如キ
至大ナル處分ヲ委任シテ立法權ヲシテ之ニ關
係セサラシメサルハ法律ノ固ヨリ望マサル所
ナリ乃チ政府ハ此命令ヲ布告スルヤ直チニ之

ヲレイスキュラーノ民衆議院及ヒ貴族院ニ報
告セサルヘカラス若シ議院分散中ナレハ次會
ヲ待ラ之ヲ報告スヘシ而シテ議院ヨリ之ヲ要
求スルキハ何時ニテモ命令謄寫書ヲ送呈スル
ヲ要ス且ツ屢々陪審停止ヲ延捱保續スルノ害
アラシコトヲ恐レ法律ハレイスキュラーノ議
院再會ノ期ニ至ルニテハ之ヲ重複シ若クハ延
捱スヘカラスト定言セリ

司法省

新法典中ニ揭示セシ審査ノ諸規則ハ地方裁判
所ニ於テ一名ヲ判事註違罪ヲ審査スルニ於テ
モ亦概子之ヲ施用ス然レモ註違罪ノ審査ト輕
重犯罪ノ審査トノ間ニ於テ數種ノ差異アリテ
其最モ著ルシキモノハ上訴ノ順序ナリ蓋シ吾
輩既ニ之ヲ陳述セルコトアリシ如ク註違罪ハ
有罪ノ問題ト雖モ之ヲ上訴スルヲ得然レモ破
毀上告ヲ爲スヲ許サス何トナレハ上告ヲ許ス
ハキ原因アル中ハ初告裁判院ニ之ヲ控訴セシ
ムレハナリ

通常ノ裁判ニ於テハ犯人ヲ面質シ若シクハ先
ツ呼喚狀ヲ發遣セシ後テニ非サレハ之ニ刑ヲ
科スルヲ得ス然ルニ註違罪ニ於テハ速決審理

ヲ為スヲ得即ケ呼喚狀ヲ發遣スルコトナリ又
ハ被審人未タ出廷セサルハト雖モ刑罰ヲ宣告
スルヲ得ヘシ此種ノ吟味ハ日耳曼ノ諸國ニ之
ヲ施行シ稱シテフォンダスヘルフレント云フ(第
四百六十條及ヒ其次條)蓋シ立法家ノ説ニ裁判
ヲ速決シ犯人ニ出廷ニ避ケシムルノ利益ヲ有
セシムルト雖モ後日不服ノ上訴ヲ為スノ權ヲ
犯人ニ付與スルハ決シテ弊害ヲ構成スルコ
トナシト則チ此上訴ハ命令書發告ノ日ヨリハ
日ヲ限リ之ヲ地方裁判所ニ致スヲ要ス然ルハ
ハ該裁判所ハ平常ノ規則ニ準レテ之カ審査ヲ
為ス

法典ノ註違罪ニ関スル分部中最重ナル問題ハ

裁判官結立ノ問題ナリキ則チ千八百六十七年
ノ政府ノ法典草案ハ第四百七十六條(地方判事
一方并ニ區ノ參事二名ヲ以テ註違罪ヲ檢案セ
シメ同見ノ上判決ヲ宣告セシムヘシト決言セ
リ然ルニ民撰議院ノ委員ハ千八百六十九年ノ
報告書ヲ以テ參事裁判ノ主義ヲ駁撃セリ其説
ニ曰ク各種人負ノ集合ヲ以テ裁判ヲ為スルハ
決シテ好結果ヲ得サラン且ツ參事裁判ハ一体
ノ判事ノ如ク不羈獨立ノ保護ヲ受有セスト填
國法典ハ乃チ千八百六十九年ノ委員ノ所見ニ
依憑シテ參事裁判ノ主義ヲ許可セズ判事一名
ヲ以テ地方裁判所ニ於テ註違罪ヲ判決セシム
ルニ決セリ

抑、臨時裁判所ハ、墮國法典ニ於テハ之ヲ許可
セスト云フモ不當ニ非サルヘシ何トナレハ特
別ノ場合ニ在テ犯罪ヲ吟味スル為メニ特種ノ
裁判所ヲ設置セサレハナリ

然レモ千八百七十三年ノ法典ハ第十八紀ノ中
葉ヨリ既ニ墮國ニ施行セレ規則ニ還復シテ非
常ノ場合ニ在テハ一層速決并ニ嚴酷ナル方法
ニ就テ裁判ヲ為スヲ許可セリ此速決非常ノ裁
判ハ初告裁判院ニ於テ之ヲ擔任セシム然ルモ
ハ該裁判院ハ陪審ノ權限ニ屬スル犯罪ト雖モ
之ヲ主任シ名ケテ臨時裁判院ト謂フ此裁判所
ハ一種ノ場合ニ當テ之ヲ関クヲ得即チ聚衆行
兇アリテ平常裁判ノ方法ヲ以テ之ヲ懲罰シ得

刑法省

ナル中若クハ一區或ハ數區内ニ殺害掠奪放火
若クハ暴行妄作シテ人心ヲ騷擾セシムルハ是
レナリ(第四百二十九條及第四百三十條)

此裁判ヲ施行セントスル中ハ特別ノ發令ヲ要
ス即チ聚衆行兇ノ場合ニ在テハ縣令ハ控訴院
長及ヒ該院ノ檢事ヲ協議セシ後チ之ヲ發令ス
他ノ場合ニ在テハ内務卿ハ司法卿ト合議セシ
後チ之ヲ發令スルヲ得

此發令ハ犯罪地ノ初告裁判院ヲシテ陪審ヲ放
棄セレ所ノ犯罪ノ裁判ヲ擔任セシム假令軍人
ト雖モ該裁判院ニ於テ其罪ヲ審問シ而シテ裁
判ノ速結ヲ要スルカ為メニ現行犯罪若クハ速
カニ兼服セシムヘシト認メタル罪人ニ非サル

ヨリハ之ヲ該裁判院ニ拘致スルコトナシ然レ
トモ此場合ニ於テモ一體ニ犯人ニ附與セシ保護
權ヲ剥奪セサルハ贅言ヲ待タサルナリ
裁判ハ凡テ公廷面質ヲ以テシ犯人ハ防護人一
名ヲ具備スルヲ要ス若シ之ヲ具備セサルキハ
官之ニ一名ヲ指示セサル可ラス
若シ列席裁判官一同犯人ヲ有罪ト發言スルキ
ハ死刑ヲ宣告セサル可カラス死刑ヨリ輕減テ
ル刑罰ヲ科スルハ唯特別ノ場合ニ在ルノニ蓋
シ臨時裁判院ハ五年ヨリ二十年ニ至ルノ禁獄
刑ヲ科スルヲ得其場合左ノ如シ 一犯罪ノ際
齡滿二十年ニ至ラサリシ者 一最重罪ノ犯人
一名若クハ數名ヲ死刑ニ處セシテ既ニ社
會ノ安寧ヲ回復スルヲ得シキ特別ノ情狀ヲ酌
量スヘキ最輕ノ罪人是レナリ然レモ若シ犯人
特別ノ場合ニ在ラス且ツ判事一同科刑ヲ發言
セサルカ若クハ三日内ニ判決ヲ爲ス能ハサル
中ハ臨時裁判院ハ其事件ヲ平常裁判院ニ送致
セサルハカラス
臨時裁判院ノ宣告セシ死刑ハ其裁判ノ如ク速
カニ之ヲ決行セサルハカラス決シテ該裁判所
ノ判決ニ對シテ上訴ヲ爲スヲ許サス死刑ハ宣
告後二時ニ之ヲ決行スルヲ要ス(第四百四十五
條)
臨時裁判院ヲ開クニ特別ノ決議ヲ要スル如ク
之ヲ閉ツルモ亦特別ノ決議ヲ要ス(第四百四十

刑 法 省

六條及_レ其_レ次條

吾輩ハ此ニ千八百七十三年ノ_レ墺國治罪法ノ_レ銓
解ヲ_レ終結セントス此至重ナル立法書中ニ於テ
ハ固ヨリ無限ノ着眼ヲ要スヘキ事項アルヘシ
ト雖モ吾輩今之ヲ概略セリ何トナレハ讀者若
シ吾輩ノ銓解ヲ_レ反覆シ以テ日耳曼原書ヨリ譯
出セル該書ト之ニ附加スル所ノ註解トヲ熟讀
スルキハ銓解ノ不足ヲ補フヲ得ヘシ
新法典ハ事項ニ因テハ緻密ニ其枝葉ヲ指示ス
ルヲ以テ凡テ外國ノ法律ハ枝葉ヲ明示スルヲ
以テ佛國ノ法典ト其性質ヲ異ニスルモノ多シ
殊更ニ原文ヲ熟讀スルヲ要スル所以ナリ審理
ニ就テ由テ負ヒタル者ヨリ約ルヘキ費用中ニ
算入スヘキモノヲ細々記載シ(第三百八十條及
其_レ次條)及_レ殺害放火詐偽等ノ審理中ニ法官
ノ_レ猛省スヘキ特別ノ規則ヲ緻密ニ指示セシ如
キ即チ是レナリ(第二百二十七條)
千八百七十三年ノ法典ノ脱稿ハ現今在職ノ_レ墺
國司法卿グラビール氏(維也納大學校ノ_レ日法律
學校官)ノ功最モ多キニ居ル此卓越タル_レ刑律家
ニシテ司法卿ノ職ヲ以テ新法典ノ制作ヲ贊成
セリ而_レ其法案編輯ニ就テハ同氏ハ其著書及
ヒ臨時委員ノ職務ヲ以テ之ヲ輔翼セシヤ其功
績實ニ大ナリキ
墺國ノ治罪法ハ實ニ千八百三十三年ノ法典ヲ
以テ大成セリ然レモ是レ唯_レ刑律中ノ一部々

ルニ過キス其刑法ト稱スルモノヲ亦大ニ改革
セサル可カラサルナリ
グラゼール氏ハ現今澳國刑律改革ノ大事業ヲ
竣成セリ則千八百七十四年十一月七日ノレ
スケラ^ト民撰議院ノ集會ニ刑法ノ草案ヲ呈
致セリ蓋シ之ヲ以テ現今施行ノ千八百五十二
年ノ刑法ニ代用セント欲スルナリ

查理里温 加園氏識ス

刑法省

奧國治罪法序說

刑法省

埃國治罪法序說

余輩ノ翻譯セシ所ノ埃國治罪法ハ即チ千八百七十四年一月ヨリ施行セシモノナリ(但シ埃地利ニ於テ之ヲ施行シ匈牙利國ニ及ホスヲ得ス)蓋シ第十九紀ノ始メヨリ埃國ニ於テ治罪法ヲ改正廣告セシコト凡テ四回ト爲ス而シテ此治罪法ハ實ニ第四回ノ改正ニ係ル夫政治ノ改廢ハ刑律上ニ變動ヲ生出スルハ識者ノ普ク理解セシ所ナリ故ニ政治沿革ノ多キ埃國ニ於テ屢々治罪審査ニ関スル法律ヲ改正セシハ毫モ驚怪スルニ足ラサル所ナリ七十年来各種ノ法典ヲ以テ該國ヲ管治セリ即チ千八百三年千八百五十年千八百五十三年及ヒ千八百七十三年ノ法典是レナリ

此最後ノ立法ハ詢ニ盛大不刊ノ典ト謂フヘシ蓋シ千八百六十七年来埃國立法ノ諸部ニ就テ許多ノ改革ヲ爲シタル自由ノ精神ヨリ生出セシモノナリ余輩該法典全部ヲ翻譯シ且ツ註解ヲ附加シ以テ緊重ナル成規ヲ明白ニシ讀者ヲシテ眼目ヲ著大ナル改革上ニ誘致セシメント冀望ス因テ余輩ハ此ニ該法典ノ或ハ舊來ノ法典ニ違反シ或ハ佛國治罪法ノ主義ト齟齬セル部分ヲ簡明ニ論述シ以テ注目セシム他ハ敢テ贅言セサルナリ

此序說ノ要旨ヲ分別シテ三章ト爲ス第一章ハ千八百三年千八百五十年及ヒ千八百

五十三年ノ法典ニ拠レル
第二章ハ千八百七十三年五月二十三日ノ法典
編成沿革ニ係ル

第三章ハ新治罪法ノ要畧ニ係ル

第一章 千八百三十年千八百五十年及々千
八百五十三年ノ法典ニ拠レル
ノ查覈

千八百三年ノ犯罪法典ハ全時ニ刑法治罪法ヲ
併備セリ而シテ之ヲ分テ二大部トナス第一ハ
犯罪ニ関シ第二ハ警察法ノ至重ナル註違ニ関
セリ又其各大部ヲ分テ二種トナス一ハ刑罰ヲ
定立シ一ハ治罪法ヲ設立セリ

刑罰省

千八百三年ノ該法典ハ治罪ノ部分ニ於テハ大
抵前百紀ノ際撰國ニ施行セシ所ノ規則ヲ取用
シ之ヲ擴充セシモノニ過キス何トナレハ該法
典ハ書面審査ヲ許シ傍聽ヲ禁シ裁判官ヲシテ
其職務ヲ以テ人ヲ拘留セシメ合法證據ノ規則
ヲ説立シ及々陪審ノ設立ヲ拒止セリ

該法典ハ自由精神ヲ發揮スル者前後之ヲ駁撃
セシト雖モ治罪法ニ関スル部分ハ要重ナル釐
正ヲ加フルコトナク遂ニ千八百五十年ニ至ル
マテ之ヲ施行セリ然ルニ千八百四十八年三月
ノ政治沿革ハ大ニ民心ヲ誘進シ其極出板判決
ノ爲メニ陪審ヲ設立スルニ至リ尋テ千八百四
十九年八月四日ノ帝王憲法ニ迨テ(第百三條)面

審公議ノ主義及ヒ訴訟主義ヲ公告シ供セテ重
大ナル犯罪ニ就テハ陪審ヲ設立スヘキヲ約定
セリ
即チ千八百五十年一月十七日ノ法典ハ此約定
ヲ完終セシモノナリ
千八百五十年ノ法典ハ緊重ナル部分ニ於テハ
日耳曼諸國當時ノ法典ノ如ク千八百八年ノ佛
國治罪法ニ依憑セリ
嗣後千八百五十一年ヨリ漸次ニ論者ノ注目セ
シ改革ヲ該治罪法上ニ馴致セリ即チ千八百五
十一年十二月三十一日ノ法律ハ帝國全土ノ為
メニ新治罪法ヲ開設シテ僅ニ其一部ノミヲ千
八百五十年ノ法典ニ依憑スヘキヲ公告セリ而
シテ千八百五十三年七月二十九日布告セル新
法典ハ千八百七十四年一月一日ニ至ルマテ之
ヲ施行セリ
然レド千八百五十三年ノ法典ハ反テ千八百三
年ノ法典ニ退復シ千八百五十年ノ法典中ニ施
行セシ閑進ヲ放棄セント曰フモ過言ニ非サル
ナリ蓋シ該法典ハ面審公議ヲ許可セシト雖モ
其公告諸項ヲ短縮セリ又法律ヲ以テ法庭ニ入
ルヲ許スヘキ人ヲ定指セリ(第二百二十三條)而
シテ其他ノ者ノ出庭ヲ許スハ裁判長ノ所見ニ
依リ壯年男夫ニ限ルトセリ
該法典ハ千八百三年ノ法典ノ規則ニ全復スル
ニ非スト雖モ合法證據ノ主義ヲ取用セリ蓋シ

裁判官ハ被審人ノ事實ヲ證示セシモノト確認
スヘキノ場合ヲ定指セスト雖モ科刑ニ就テ要
用ナル證據ノ最少ナル局限ヲ定示セリ
該典ハ全ク陪審ヲ廢止セリ假令出版犯罪ニ於
テストモ亦之ヲ停メリ而シテ千八百三年ノ法
典ニ及シテ被審人ニ許スニ防護人ヲ以テスル
ト雖モ唯タ審理結終ノ後ニ非サレハ之ヲ用フ
ルヲ許サ、リキ

第二章 千八百七十三年ノ法典編成沿革
千八百六十年及ヒ千八百六十一年ノ伊國戦争
ヨリノ後自由精神ノ發動シ及ヒ大ニ憲法ヲ改
革セシヨリ世人ヲシテ犯罪法ノ過謬就中最モ
治罪ノ錯誤ヲ猛省セシメタリレイヌ左ラリキ

司法省

ノ民撰議院ハ千八百六十一年及ヒ千八百六十
二年ニ於テ屢々刑事審理ノ改革及ヒ陪審法ノ
設立ヲ為スノ緊要ナルコトヲ證示セリ初議皆
ナ謂ラク此目的ヲ達スルノ方法ハ千八百五十
年ノ法典ヲ回復スルニ如カスト然レ民日ナラ
スシテ此議案ヲ拋棄セリ蓋シ千八百五十年ノ
法典ハ大ニ補充スヘキ缺典アリ又改釐スヘキ
過謬多シ元來佛國ノ法典ヲ模作セシモノナル
ヲ以テ日耳曼ノ刑法學ハ漸次該法典ノ精神思
惟ヲ駁評スルニ至レリ是ニ於テ論者ハ千八百
五十年ノ法典ヲ以テ徒ニ改定法ノ基礎トスヘ
キノ議ヲ決セリ尋テ委員ヲ司法省内ニ置キ千
八百六十一年新法ノ草案ヲ起シ同年十一月之

ヲ編成シ議院ノ委員ノ評議ニ供セリ當時内閣
ノ更變アルニ會シ其事中絶ス千八百六十三年
ニ至テ再々之ヲ着手シ全年ノ春既ニ全備ノ法
案ヲ刊行セリ然レ氏之ヲ真ニレイケスラレ左
ノ議院ニ致セシハ千八百六十五年ノ帝王ノ特
議ニ據ルヲ始シメトナス當時内閣復々變動シ
法案モ亦種々更正ヲ加ヘタリ千八百六十七年
十一月二十八日ニ至テ遂ニ之ヲレイケスラレ
テノ民撰議院ニ送致セリ議院ハ之ヲ主任委員
ニ致シ委員等ハ七十二回ノ讀會ヲ經テ始メテ
千八百六十七年十月二十六日ノ報告書ヲ說院
ニ陳呈スルヲ得タリ該委員ノ法案ハ種々緊重
ノ各項ニ就テ政府ノ法案ト所見ヲ異ニスル所
多シ民撰議院解散ノ期既ニ迫ルヲ以テ之ヲ討
論スルヲ得スレテ千八百七十二年ニ至ツテ遂
ニ此論題ヲ復議セリ
千八百六十七年十一月政府此法案ヲ議院ニ致
セシ以來至重ナル事件ヲ生出セリ蓋シ千八百
六十七年十二月二十一日ノ司法權ニ関スル帝
國ノ憲法ハ第十條及ヒ第十一條ヲ以テ墮國治
罪法ノ基由タルハキ主義ヲ設立セリ此二條ノ
旨趣則チ左ノ如シ
第十條裁判官ノ前ニ於テスル公審ハ民事刑
事ヲ論セス凡テ面質ヲ以テシ衆庶ノ傍聽ヲ
許ス但シ法律ヲ以テ特別ノ場合ヲ定示スル
中ハ此限ニ在ラス刑事審理ニ就テハ訴訟ノ

司法省

方法ヲ施用スヘシ

第十一條重刑ヲ科スヘキ犯罪(但シ法律ヲ以テ之ヲ定ム)輕重國事犯及ヒ出版ヨリ生スル輕重犯罪ハ陪審ヲ設置シテ其罪ノ有無ヲ決スヘシ

千八百六十九年三月九日ノ法律ハ半ハ此主義ヲ實施シテ出版犯罪ノ爲メニ陪審法ヲ設立セ

リ
千八百七十二年二月十六日司法卿グラゼール氏ハ治罪法ノ法案ヲ民撰議院ニ送致セリ蓋シグラゼール氏ハ法案ノ編輯ニ任セシ諸委員ノ報告者トナリテ極テ當初編纂ニ尽力セリ該法案ハ大ニ千八百六十九年ノ民撰議院委員ノ法

刑 法 省

案ニ類似セリ然レ氏亦緊重ナル一事項ニ就テ相異ナル所ナリ蓋シ千八百六十七年及ヒ千八百六十九年ノ法案ハ當時民撰議院ニ送致セシ刑法ニ符合スレト雖モ千八百七十二年ノ法案ハ毫モ刑法ノ法案ニ符合セサリキ而レテ刑法ノ法案ハ先ツ停止セラレタリ之レカ爲メニ新治罪法ハ千八百七十二年三月十一日ニ民撰議院ノ許可スル所トナリ千八百七十二年六月六日之ヲ貴族院ニ致シ該院ハ千八百七十三年ノ初メニ之ヲ投票セリ尋テ千八百七十三年五月二十三日帝王ノ允許ヲ受ケ因テ千八百七十三年六月三十日帝國法律誌ニ公載シ以テ六箇月ヲ經テ即チ千八百七十四年一月一日ヨリ全國

必行ノ法ト爲セリ且ツ今時ニ治罪法ニ附加ス
ヘキ二種ノ法律ヲ允可公告セリ即チ陪審人名
簿編成法陪審停止法是ナリ

第三章 新治罪法ノ要畧

千八百七十三年ノ法典ハ司法權上ノ法律第十
條及ヒ第十一條ニ定示セル大主義ヲ盡ク實施
セリト云フヘシ此大主義トハ即チ訴訟吟味公
然及ヒ面質吟味ノ主義及ヒ千八百六十九年ヨ
リ起立セシ陪審ノ編制是レナリ此等ノ主義ハ
固ヨリ新奇ノモノニアラス何ヲ以テ之ヲ言フ
トナラハ千八百五十年ノ澳國法典及ヒ最前千
八百八年ノ佛國法典中ニ既ニ之ヲ掲載シタリ
キ然レモ千八百七十三年今ノ法典中殊ニ天理

司法省

ニ吻合シテ最モ著シルシキモノハ右ノ主義ヨ
リ脱胎セシ好結果トモ實ニ澳國立法家ハ其識
認セシ方法ノ讚嘆ヲ受クルモ元當ナルコトヲ
自ラ感覺セシカ如シ何レトナレハ立法家ハ民
撰議院ニ致ヤシ報告書中若クハ討論ノ際ニ在
テモ屢々千八百五十年ノ法典及ヒ佛國法典ヲ
論難スルニ其確定セシ根柢ノ主義ニ就テ至理
適當ノ趣旨ヲ引出セサリシヲ以テセリ

新治罪法ハ訴訟ノ主義ヲ許認セリ此主義ノ故
ヲ以テ裁判官ハ其職ヲ以テ犯罪ヲ摘發スルヲ
得スシテ訴訟人ヲシテ裁判官ニ犯罪ヲ審理セ
シムルヲ得セシメタリ日耳曼ニ於テ此意趣ヲ
短簡ニ説明セル諺語アリ訴訟人アラサル地ニ

ハ裁判官アルコトナシ
 此主義ヲ施行セレ千八百七十三年ノ英國法典
 ハ二種ノ要點ニ就テ又大ニ注目スヘキモノアリ
 第一ハ訴訟權ヲ附與スヘキモノ第二ハ立法
 家訴訟權ヨリ生出セシ趣旨是レナリ
 新治罪法ニ於レハ檢事ハ訴訟ノ專權ヲ有セス
 則テ許多ノ場合ニ於テ(第四十六條及ニ其次條)
 被害人自カラ之ヲ保持スルヲ得
 註違及ニ輕罪ニ就テハ被害人ノ稟訴ニ依ラサ
 レハ檢事ノ專斷ヲ以テ亂問セサルモノ多シ又
 被害人ハ間接ニ訴訟ヲ爲スコトナク直ニ刑事
 裁判所(第四十六條)ニ之ヲ致スコトヲ得ヘシ
 千八百五十年及ニ千八百五十三年ノ法典モ亦
 同法省
 右ノ場合ニ在テハ被害人ノ訴訟權利ヲ許可セ
 リ然レニ輕罪ニ係ルキハ被害人ハ告ツ檢事ニ
 稟告シ檢事之ヲ拒絶セシニ非サルヨリハ此權
 利ヲ施用スルヲ得ス而シテ千八百七十三年ノ
 法典ハ檢事ノ拒絶ヲ待ツヲ要セス
 又後取原告又ト稱スルモノヲ許可セシハ最モ
 緊重ナルノ改革ナリ
 蓋シ檢事ハ一々ト訴訟ヲ爲セシ後テ復々之ヲ
 放棄スルヲ得然ルキハ裁判所ハ其審理ヲ停止
 セサルヲ得ス然ルニ千八百七十三年ノ法典ハ
 民事原告人ヲシテ後兼原告人ノ名稱ヲ以テ犯
 罪ノ種類如何ヲ問ハス檢事ニ承テ訴訟ヲ保續
 シ刑罰ヲ請求スルコトヲ得セシム(第四十八條)

撰國立法家ハ後承原告人ノ方法ハ亦弊害ヲ生
セシコトヲ疑懼セリ何ントナレハ檢事訴訟ヲ
放棄セシニ因テ原告人ハ多少ノ損害ヲ受ケシ
ヲ以テ具再訴ハ裁判官抑制ノ憂一無キニシモ
アラズ故ニ成ル丈ケ之ヲ豫防セシカ爲メニ千
八百七十三年ノ法典ハ當初ノ審理ヲ經スレテ
直テニ裁判所ニ訴訟ヲ爲スコトヲ民事原告人
ニ禁止シ且ツ社會ノ利益ヲ妨害スハキツ防ク
カ爲メニ檢事ヲ以テ後承訴訟ノ施行ヲ監督セ
シメ若シ本人復々之ヲ放棄セシキハ檢事之ヲ
主任スルヲ得ヘシ(第四十九條)
檢事及ヒ原告人ハ自ラ訴訟ノ本主タリ是レ立
法家ノ訴訟主義ヨリ引出セシ至重ナル結果ノ
一ナリ若シ檢事若クハ原告人ハ審理裁判官又
ハ裁判所ニ訴訟ヲ爲セシ後チ復々之ヲ放棄セ
シキハ裁判官又ハ裁判所其審査ヲ廢止スルヲ
要ス
審理中訴訟ヲ放棄シテ裁判所ノ審査ヲ廢止セ
シムルノ權利ハ實ハ原告人ニ至重ナル權勢ヲ
附加セリト爲スヘシ又訴訟主義ニ依テ他ノ一
改革ヲ爲シ審理及ヒ吟味ノ結終ニ就キ原告人
ニ最上ノ權利ヲ附典セリ何ソヤ蓋シ千八百五
十年及ヒ千八百五十三年ノ法典ニ於テハ審理
裁判官ノ決議(事件送致ノ決議ヲ以テ裁判所ノ
判決ヲ要セシト雖モ此法典ハ原告人ヲシテ其
編輯スル所ノ訴訟書ヲ直テニ裁判所ニ呈致シ

判決ヲ請求セシム(第二百七條及ヒ其次條何ト
 ナレハ立法家ハ原告人訴訟ノ本主タルカ故ニ
 其訴訟ヲシテ當初司法決議ニ附屬セシムルハ
 至理ニ合ハスト思惟セリ而シテ其事件送致ノ
 決議ヲ廢止セシハ徒ニ理ニ合ハサルノニニ非
 ス立法家ハ之ヲ以テ彼ノ裁判所ニ被審人ヲ送
 致スハキ司法ノ決議ヨリ生出シ易キ犯人ノ損
 害ヲ豫防スヘシト思惟セシナリ
 然レハ原告ノ訴訟書ハ未タ確定ノ性質ヲ有セ
 シモノト爲サス而テ被審人ハ此訴訟ニ對シテ
 抗禦ヲ爲スコトヲ得一ニ(第二百八條及ヒ其次
 條)而シテ其抗禦ノ理不理ヲ検査スル所ノ控訴
 院ハ訴訟狀ヲ認定シ或ハ其事項ヲ取捨シ或ハ
 全ク訴訟狀ヲ放棄スルヲ得一ニ則チ第一第二
 ノ場合ニ在テハ控訴院ノ議ヲ以テ訴訟事件ヲ
 裁判所ニ送致シテ審理ヲ爲サシム然レハ立法
 家ハ被審人ノ損害(直接又ハ間接ニ生スル)ヲ豫
 防センコトヲ猛省セリ何トナレハ抗禦ヲ還卻
 シ訴訟狀ヲ確認セシ所ノ判決ヲ法廷ニ於テ公
 然朗讀スルヲ許サス但々其判決部分中ノ訴訟
 狀中ノ事項ヲ放棄セシテ以テ犯人ノ利益ニ関
 セシモノニ限り之ヲ朗讀セシム(第二百四十四
 條)

訴訟狀ハ法廷ニ於テ公然之ヲ朗讀スルヲ法ト
 ス然レハ證據人ノ思惟上ニ多少ノ感覺ヲ與ヘ
 シコトヲ恐ルカ故ニ証人退出セシ後チニ非

サレハ之ヲ朗讀スルヲ許サス(第二百四十四條)
防護人ノ輔佐ヲ受クヘキ被審人ノ權利ハ訴訟
主義ニ在テハ殆ト己ムヘカラサルノ要旨タリ
何トナレハ原告人アリテ防護人ナキハ疑問
ト防護トノ間ニ不權衡ヲ生スルヲ以テ之ヲ防
クカ爲メニ防護人ヲ具備セシムルハ勿論適理
ト云フヘキナリ
是故ニ千八百七十三年ノ法典ハ被審人ニ許ス
ニ防護人ヲ採用スルヲ以テシ又重罪裁判院ノ
審理ニ係ル犯罪ハ官必ス防護人一名ヲ附典ス
ルヲ要セリ其防護ニ関セシ法典ノ成規中最モ
注目スヘキモノハ防護權利ヲ審理後ニ附典ス
ルノミナラスシテ審理中ニ於テモ亦之ヲ許可
セシ一事ナリ最モ防護人ハ審理ノ際ニ方テ被
審ノ疑問ヲ傍聽スルヲ得ス(第九十七條)ト雖モ
法廷外ニ在テハ常ニ被審人ニ忠告ヲ爲シ教諭
スルコトヲ得且ツ法典ハ特ニ防護人ニ附典ス
ルニ審理ノ書類ヲ見知スルコトノ權利ヲ以テ
セリ(第九十五條)是レ皆ナ立法家ノ審理中ニ於
テモ亦訴訟審理ノ主義ヲ施用セシヲ顯明證示
スルニ足ルヘシ
又被審人欠席ノ際裁判ヲ爲スヲ許スハ特別ノ
場合ニ限ルトス而シテ其甚々稀少ナルハ蓋シ
亦立法家カ防護權ヲ貴重セシ所以ナリ法典ノ
真意ヲ推測スルニ被審人ヲ問質セシテ之ヲ
刑ニ処スヘカラサルナリ但シ裁判所ノ呼喚ニ

司法省

從順セサル者ヲ罰スルハ理ノ當レルナリ乃々
千八百七十三年ノ法典ニ示ス如キ者ニ對シ
テ民權ヲ剝奪セリ然リト雖モ司法ノ命令ニ違
反セシヲ以テ犯人ヲ問質セス防護ヲ爲スヲ得
サルノ前ニ於テ之ニ犯罪ノ刑ヲ科スルハ豈ニ
之ヲ適理ト謂フヘケンヤ
英國法典ハ糾問開始ニ至ルマテ訴訟ヲ保持ス
ルヲ許可セリ然レトモ五年以内ノ自由剝奪刑
ヲ科スヘキ輕犯罪ニ非サルヨリハ糾問着手後
判決ニ至ルマテ訴訟ヲ保續スルヲ得ス此場合
ニ在ルト雖モ犯人自ラ呼喚狀ヲ受ケ檢査ヨリ
判決ニ至ルマテ訴訟ヲ保續セシコトヲ請求ス
ルヲ要ス且ツ主任ノ裁判院ハ犯人不在ヲ以テ
事實ヲ發見スルヲ得スト認ムルハ何時ニテ
モ審理ヲ停止スルノ權ヲ有ス(第四百二十七條)
千八百七十三年ノ法典中ニ公廷審理ノ主義ヲ
取用セシハ則チ千八百五十年ノ法典ニ復歸セ
シナリ蓋シ千八百三年ノ法典ハ秘密審理ヲ許諾
シ千八百五十三年ノ法典ハ稍々公廷審理ヲ許
可セシト雖モ其分限甚々狭小ナリキ然ルニ新
法典ハ其分限ヲ開放シテ全ク公廷審理ヲ許可
セリ
又千八百七十三年ノ法典ハ面質ノ主義ヲ布告
セリ此主義ハ既ニ千八百五十年及ヒ千八百五
十三年ノ法典ヲ以テ之ヲ許可セリト雖モ千八
百七十三年ノ立法家ノ所見ニ據レハ旧法典ハ

司法省

此主義ニ就テ緊要ナル至理ヲ發出セサリント
思惟セリ

審理ハ多ク記載ヲ以テ成立スルカ故ニ面質公
議ヲ以テ主トスルニ至テハ裁判上第二ノ地位
ニ降レリ而シテ陪審ニ関スル犯罪事件ニ非サ
ルヨリハ其要用ヲ見ス故ヲ以テ裁判官ハ其審
理ノ事件ニ均泥セスシテ殊ニ公審中經驗セシ
事ヲ猛省セサルヘカラス其拘泥ノ害ヲ防クカ
爲メニ審理証人ノ調書ハ法律ニ特定セル場
合(第二百五十二條)ニ非サルヨリハ法廷ニ於テ
之ヲ朗讀スルヲ得ス

司法省

墺國立法家カ面質審査ノ主義ニ根柢セシ緊重
ナル要旨ノ一ハ控訴ニ関スル特種ノ規則タル
コト疑ヒナレ此規則ハ左モ論者ノ注目ヲ受ク
ヘキ所以アリ何トナレハ積年日耳曼諸國ニ於
テ討論セシ一大問題ヲ墺國治罪法草案ニ依テ
結終スルヲ得タレハナリ

墺國ノ法典控訴ヲ爲スヘキ場合ノ數ヲ減省レ
唯刑罰及ヒ民事利益ニ就テノ之ヲ爲スヲ許
可セリ而シテ有罪ノ問題ハ控訴ヲ爲スヲ許サ
ス即チ處刑人ハ控訴院ニ就テ放免ヲ受クルノ
控訴ヲ爲スヲ得ス換事モ亦初告裁判院ニ於テ
放免ヲ受ケタル犯人ニ刑ヲ科センカ爲メニ控
訴ヲ爲スヲ得ス

立法家ハ有罪問題ノ控訴ハ面質審査ノ主義ニ
及違スト思惟セリ

蓋シ裁判官ノ事件ヲ認定スルヤ眼前ノ証拠ニ
按拠スルヲ要ス故ニ若シ有罪ノ控訴ヲ許スル
ハ控訴判事ハ自ラ直チニ問質スル所ヲ以テ判
決スルヲ得スレテ審理裁判官ノ問質セシ所ニ
基テ決議ヲ為サ、ルヲ得ス從テ初告院ニ陳呈
セシ証拠人ノ陳述書モ控訴判決ノ際緊重ノ用
ヲ為スヘシ然ラハ大約書面審査ノ方法ニ復還
スルト謂フモ不可ナルナシ勿論控訴判事ハ再
ニ証拠人ヲ問質スルヲ得ルト雖モ斯ノ如キ中
ハ控訴ノ審理逐次ニ延滞シ而シテ多少ノ費用
ヲ要スルノ害アルヘシ
且有罪ノ控訴ハ壞國ニ於テ許可セシ証拠法ト
相矛盾スル所アルハ立法家ノ注目セシ所ナリ
若シ合法証拠ノ方法ヲ許用スルキハ有罪ノ問
題ハ即チ裁判官權利ノ問題トナリ法律ノ成規
ニ照準シテ刑ヲ科スル為メニ要用ナル合法証
拠アルヤ否ヲ檢探スルヲ要ス然ルキハ有罪ノ
控訴ヲ許可スルモ理ナキニ非ルナリ何トナレ
ハ控訴裁判官ハ輒チ法律請求スル所ノ証拠ア
ルヤ否ヲ發見スルヲ得ヘシ然レニ裁判官其感
覺心ヲ以テ決議スルノ自由ヲ有スルキハ有罪
ノ問題ハ即チ事實上ノ問題トナリ控訴判事ハ
初告裁判所ノ感覺ノ原由ヲ分明識ルコト能ハ
サルヘシ右ノ如クナルカ故ニ合法証拠ノ方法
ニ於テハ立法家ハ權利ノ問題即チ有罪ノ問題
ヲ判決スルニ就テ控訴判事ニ信憑ヲ置クト雖

刑 法 省

モ論者素ヨリ之ヲ非トナサス然レモ全ク判事
ノ思惟ニ委任スル所ノ事實ノ問題ニ至テ控訴
判事ニ上位ヲ與フルハ吾輩以テ理アリトナサ
ルナリ若シ此事實問題ヲ判決スルニ就テ初
告判事ハ十分信スルニ足ラストモ司法ノ組
立及ヒ判事授任ノ方法ノ改革ヲ希望セサル可
ラスレイスをラレテ議院ニ於テモ上ニ関列
セル諸考案ハ控訴ノ問題ニ就テ討論ヲ盡セシ
モノタリ
余輩ノ陳述シタル所ノ控訴權ノ減縮ハ註違罪
ニ就テハ之ヲ用フルヲ得ス蓋シ註違罪ハ地方
裁判所ノ一名判事ノ判決ニ係ルヲ以テ犯人ヲ
保護スルニ充分徧普ナラス故ヲ以テ立法家ハ
其保護ヲ補充センカ爲メニ控訴ヲ許可セシナ
リ是ヲ以テ註違ニ就テハ有罪控訴モ亦其許可
スル所トナリ其施行ノ場合ハ佛國ノ法典ニ於
ケルヨリモ一倍之ヲ拡張セリ何トナレハ國
ノ立法家ハ註違罪ニ就テハ何刑ヨリ以下ハ之
ヲ控訴スヘカラスト定言セサリキ(第四百六十
四條)
地方裁判所ノ判決ニ對スル控訴ト他ノ裁判所
ノ判決ニ對スル控訴トノ分別ハ立法家ヲシテ
復々自ラ他ノ分別ヲ起立セシムルニ至ル即チ
一體ノ控訴ヲ判決スルハ公知ヲ要セスト雖モ
地方裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ限り必ス公
然之ヲ判決セサルヘカラス(第四百七十二條)

控訴ノ原由ハ、煥國治罪法ニ於テ、佛國法典ヨリ
減少ナリト雖モ、他ノ一点ニ於テハ、仏國千八百
八年ノ治罪法ヨリ、煥國法典ハ、一層寛大ナルモ
ノアリ、蓋シ、佛國ノ法典ハ、重罪裁判院ノ決議ニ
對シテ、控訴ヲ為スヲ許サ、レトモ、煥國ニ在テ
ハ、初告裁判院ノ判決ヲ控訴シ得ヘキ場合ニ在
テハ、重罪裁判院ノ判決ト雖モ、亦之ヲ控訴スル
コトヲ得セシム、(第三百四十五條)
控訴ハ、之ヲ控訴院ニ陳呈スルヲ得、此目點ニ就
テ、立法家ノ千八百五十年ノ法典ヲ用ヒサリシ
原因ハ、之ヲ推測スルニ難カラサルナリ、第一ニ
重罪裁判院ノ決議ト裁判官ノミヲ以テ成立セ
ル他ノ裁判所ノ判決トヲ分別スルノ理ナカル
ハ、シ、何トナレハ、他ノ裁判所ト雖モ、合法證據ノ
方法ニ拘泥スルコトナク、自己ノ感覺心ニ拠テ
決議ヲ為スニ非スヤ、且ツ、初告裁判院ノ決議ノ
控訴ヲ許可シ而シテ、反テ、重刑ヲ科スヘキ所ノ
重罪裁判院ノ決議ノ控訴ヲ許可セサルハ、條理
轉倒セシモノナラン、蓋シ、立法家此ニ見ルコト
アル歟、
煥國法典ハ、控訴ノ外上訴ノ方法中ニ、破毀上告
并ニ、再審ヲ許可セリ、但シ、此再審ハ、我國ノ再審
願訴ニ稍々類似スル所アリ、吾輩後ニ之ヲ説明
セシトス、
破毀上告ニ就テハ、上告ヲ受クル所ノ破毀裁判
院ノ權限ハ、煥國ニ在テハ、佛國ニ於ケルヨリハ

法省

廣大ナルコトヲ注目セサルハカラス蓋シ佛國
ニ在テハ大審院上告ニ係ル判決ヲ破毀セシキ
ハ自ラ其事件ヲ審理セシテ之ヲ他ノ一裁判
所ニ送致セサルハカラス澳國立法家ハ乃々謂
ヘラク斯ノ如クナルキハ大審院ハ有名無實ノ
職務ヲ有シ之カ爲メニ多少ノ繁雜及ヒ遲滯ヲ
生スヘシト故ニ立法家ハ大審院ニ附典スルニ
上告ニ係ル決議ヲ破毀セシ後ハ事宜ニ因テ自
ラ其判決ヲ擔任スルノ權利ヲ以テセリ(第二百
八十八條第四項)

法典中刑事再審ノ名ヲ以テ掲載セレ上訴ノ方
法ハ最モ一種ノ別質ヲ有セリ蓋シ再審ハ審理
ヲ停止セシ後々新証拠ヲ發見セシテ以テ再ヒ
審理ヲ関キ若クハ之ヲ保續セサルハカラサル
ノ場合ニ於テ請求スル所ノ審査ヲ還復スルヲ
謂フナリ乃々再審ハ全ク上訴ノ性質ヲ有スル
モノニ非ス何トナレハ再審ヲ爲スハ未タ司法
判決ヲ爲サレノ前ニ在レハナリ然レモ判決
後更ニ事實ヲ發見シ若クハ證據アルニ由テ一
且最後ノ判決ニ係ル所ノモノヲ重複スルコト
ノ上訴ノ方法ヲ稱シテ亦刑事再審ト謂フ此上
訴ノ方法ハ既ニ千八百五十年及ヒ千八百五十
三年ノ法典ニ由テ之カ規則ヲ立テタリト雖モ
千八百七十三年ノ法典ハ一倍廣大ナル方法ニ
就テ之ヲ擴張セリ則ケ之ヲ爲スヘキノ場合ハ
甚々多數ニシテ最後判決ノ權威ノ主義ハ殆ト

司法省

狭小ノ分限内ニ退縮セシカ如ク然リ
再審ハ犯人ノ利益ノ為メ(第三百五十三條第三
百五十五條及ヒ第三百五十六條)又ハ其損害ノ
為メ若クハ犯人ヲ放免セシムル為メ若クハ犯
人ニ輕減ノ刑ヲ科セシムル為メ又ハ放免ニ係リ
シ被審人ニ科刑セシムル為メ又ハ一層ノ重刑
ヲ宣告セシムル為メ(第三百五十三條及ヒ其次
條)凡テ之ヲ為スヲ得ハ立法家ハ社會ノ安寧
法理ハ有罪ヲ刑シ無罪ヲ放免スヘキヲ要求ス
ルヲ以テ犯人ノ利益ノ為メ再審ヲ許スルハ亦
犯人ノ損害ノ為メモ之ヲ許用スルハ固ヨリ
正理ニシテ至要ナリト思惟セシナリ
凡ソ上訴ハ法典ニ定示セル期限内ニ非サレハ
之ヲ為スヲ得ス然レモ新法典ハ定期内ニ其權
利ヲ施用セサリシ犯人ニ特別ノ恩典ヲ附與ス
ルヲ得セシメタリ蓋シ此恩典ハ回來ノ法律ニ
掲載セサリシモノナリ即チ既滿期限ノ還典ヲ
本件ノ上訴擔任ノ裁判所ニ請願スルヲ得ル是
レナリ此請願ヲ為スニハ暫クモ停止スヘカラ
サル事故アリテ之カ為メニ上訴ノ期限ヲ顧ミ
ルヲ得サリシヲ確證セサルヘカラス(第三百六
十四條)

陪審ノ組立ハ吾輩ノ説明ヤレ如ク新法典ノ基
礎中ノ一タリ然レモ陪審ノ規則ハ新法典中ニ
之ヲ掲明セシテ特リ重罪裁判院ノ審理規則
ヲ關列セシメ陪審ヲ呼喚シテ判決ヲ為サシ

ムハキ犯罪ハ新法典施行上ノ法律中ニ之ヲ定
示セリ此法律ハ治罪法ト同日ニ(千八百七十三
年五月二十三日)布告シ陪審人名簿編成ノ方法
ヲ定立セリ又同時ニ布告セシ他ノ法律ヲ以テ
陪審臨時停止ノ事ヲ定ムタリ
陪審裁判ノ規則ハ多クハ我國法典ノ規則ニ類
似セリ就中數種ノ事項ハ全ク奧國治罪法新設
セシモノ世人ヲ注目セシムハキ成規アリ
公審終結及ヒ裁判院長ノ要略陳述ノ後ニ於テ
疑問ヲ陪審人ニ付授スルノミナラス檢事請求
及ヒ防護人答辨ヲ爲サル前ト雖モ(第三百十
六條)證人及ヒ鑑定人ノ陳述ヲ終ルキハ直チ
ニ疑問ヲ陪審人ニ爲スヲ得ハシ立法家ハ斯ノ
如クシテ豫メ公審ノ分界ヲ定示センコトヲ企
望セリ此事項ニ就テハ奧國法典ノ成規ト羅馬
ノ規則裁判トノ間ニ稍々相類似スル所アリ何
トナレハ羅馬ニ在テハ裁判長ノ付下セシ規則
ヲ以テ公審ノ分界及ヒ判事ノ權限ヲ豫定セシ
ナリ
院長ノ要略陳述ハ新法典モ亦之ヲ保存セリ然
レモ院長ハ徒ニ公審ヲ要述スルニ止マラス且
ツ訴訟事件ノ法律上ノ種類ヲ陪審人ニ指示シ
供セテ疑問中ノ法語ノ意味ヲ説明スルヲ要ス
(第三百二十五條)院長ノ指示ハ原告若クハ被告
ノ請ニ由テ調書中ニ登記セサルハカラス何ト
ナレハ指示中ノ誤謬ハ後日破毀上告ノ原因タ

レハナリ(第三百四十四條第八項)

裁判長法廷ニ於テ上項ノ如ク説明ヲ為スト雖
モ尚ホ陪審人之ヲ明瞭ニ理解セサル事項アル
キハ裁判長ニ陪審評議室ニ於テ再々ヒ精要ノ
説明ヲ為サンコトヲ請求スルヲ得ヘシ然ルキ
ハ院長ハ書記官及ヒ原被両造(裁判所内ニ在ル
キハ)ヲ同伴スルヲ要ス(第三百二十七條)原告人
及ヒ被告人ノ此席ニ參會スルハ實ニ一大要件
ト謂フヘシ何トナレハ院長陪審人ニ附與スル
所ノ説明中ニ疑審誤謬アレハ原被之ヲ摘發シ
調書中ニ之ヲ登記セシコトヲ請求スルヲ得ヘ
シ而シテ此際生出セシ誤謬モ亦院長ノ法廷ニ
於ケル誤謬ト同ク破毀上告ノ原因タルヘシ(第

三百二十七條

陪審人ノ確認ノ如何ヲ論セス裁判院ハ之ニ續
テ必ス決議ヲ為スヲ要ス(國治罪法ハ放免ノ
宣告ハ必ス裁判院ノ決議書ヲ以テスルヲ要シ
院長ノ辭令書ヲ以テスルヲ得ス(第三百三十四
條)此決議書ハ有罪不刑ノ決議ノ如ク之カ破毀
上告ヲ為スヲ許ス

陪審人ノ權限ハ治罪法施行上ノ法律特別ノ方
法ヲ以テ之ヲ決定セリ此法律ハ出版ヨリ生ス
ル輕重犯罪ハ一切陪審ヲ設立シテ裁判ヲ為ス
ヘキヲ確定セリ然レトモ輕重國事犯及ヒ普通
犯罪ノ陪審裁判ヲ要スルモノハ其種類ヲ開列
セリ立法家ハ千八百六十七年十二月二十一日

ノ憲法中司法權ニ関セシ第十一條ニ陪審ハ輕重犯罪ノ最重ナルモノ、爲メニ設立スト云ハル主義ニ靠着セリ但シ最重ノ刑トハ禁獄五年以上ノ刑ヲ謂フ勿論犯罪中ニ五年以上ノ禁獄ニ係ル者アリ五年以内ノ禁獄ニ係ル者アルヲ以テ立法家ハ訴狀中ニ禁獄五年以上(五年ヲ含蓄ス)ノ刑ヲ要求セシ犯罪ニ非サレハ陪審ノ權限内ニ在ラスト論定セリ(治罪法施行上ノ法律

第六條

陪審人名簿編成ノ方法ハ千八百七十三年五月二十三日ノ法律ヲ以テ之ヲ定制セリ此法律ノ布告ハ治罪法ト日ヲ同フセシト雖モ治罪法ニ先タテテ之ヲ施行セリ即チ布告本日ヨリ千八

司法省

百六十九年三月九日ノ法律ニ依テ出板犯罪ヲ擔任スハキ陪審ニ就テ之ヲ施行セシメタリ該法律ハ第一ニ陪審人タルヲ得ル爲メニ具備スハキ要用ナル性質方法ヲ揭示セリ法律第一條ヲ見ルニ陪審人タルニ要用ナル事項ヲ掲クル左ノ如シ一齡滿三十年以上ナルコト一レイステテラレシノ民撰議院代議士ヲ出セシ諸國ノ人民タル權利ヲ有スルコト一滿一年以上該區ニ住居セシ者一人口三万以下ノ區ニ在テハ直税十フロラン以上ヲ出スニ堪ハタル者其他ノ區ニ在テハ二十フロラン以上ヲ出スニ堪ハタル者但シ代言人代書人大中學校ノ教師公立大學校ノ博士タル者ハ定税ヲ

約メサルモ亦陪審人タルヲ得ハシ

又陪審人タルノ權ヲ失スルモノヲ揭示セルコト左ノ如シ 一身體又ハ精神ノ恒度アリテ其職ニ堪ヘサル者 一全ク民權ヲ有セサルモノ

一司法官其負債者タルヲ公告セシ者(即ケコシキニスヘルフレシ) 一(身代限ノ一種)ニ係ル者ハ其結尾ニ至ルマテ又身代限ノ高クハ千八百六十八年十二月二十五日ノ法律第二百四十六條ニ依テ定示セル權利ヲ回復スルニ至ルマテ 一審理ニ係リ糾問ヲ受ケ或ハ刑罰ニ處セラルモ一處刑ニ罹リテ其撰舉權ヲ剝奪サレシモノ但シ復權ヲ受ケルキハ此限ニ在ラス 陪審ノ職ヲ兼務スルニ故障アルモノ左ノ如シ

司法省

一在職ノ諸官吏 一海陸軍人及ヒ在職ノ國民軍若クハ不在職タリトモ給料ヲ受ケテ家居スル者 一軍務ニ関スル屬吏 一教導職及ヒ官ノ許可ヲ受ケタル宗教會社ノ役僧 一小學校教師 一驛道鐵道傳信諸若クハ汽船局ノ屬吏

陪審ノ職ヲ除免スルモノ左ノ如シ 一齡滿六十年以上ノ者 一邦會(帝國內諸邦ノ公會ヲ云フ)帝國公會及ヒ諸公會ノ代議士開會ノ間 一假令在任セスト雖モ軍務ニ充ツル者 一帝室ノ用ヲ務ムル者 一公立學校ノ教師 一内科醫但シ藥舗主ハ區長ヨリ其主職ヲ要セシヲ公告セシ中ハ其翌年陪審ノ職ヲ除免ス

あやあ

一陪審若クハ陪審補ノ職ヲ一回全勤セシモノ
ハ翌年中之ヲ除ク
陪審人名簿中ニ本源名簿毎年名簿毎會名簿事
件名簿ノ別ヤリ注目セサルハカラス
區長ハ自ラ區會議員二名ヲ撰舉シ
毎年十月ノ初メニ區内ノ陪審人タル權ヲ有ス
ル者ノ人名簿ヲ編成ス此名簿ハ期日ヲ定メ之
ヲ區務所ニ貼示シテ其權利ヲ有スル者ヲシテ
告訴ヲ爲スヲ得セシム此告訴ハ之ヲ區長及ヒ
區會議員二名ヲ以テ結立スル所ノ委員局ニ呈
致スルモノトス十月ヲ限リ改正ノ人名簿ヲ裁
判區ノ長吏ニ送致シ其規則ニ及スル所アレハ
長吏ハ之ヲ區長ニ指示シテ釐正ヲ爲サシム若
シ區長障礙アルハ長吏自ラ之ヲ釐正スヘシ
而シテ裁判區長吏ハ其管内ノ陪審人名簿ニ其
書類ヲ附シテ初告裁判院長ニ送致シ且ツ此入
名簿中知識徳義性質ノ篤實ナル剛毅ナル數種
ノ國語ヲ解スル等(數國ノ方語ヲ通用スル國ニ
在テハ)最モ衆ニ起ヘテ陪審ノ職ヲ勤ムルニ適
當ナリト認定スルモノヲ指示スヘシ
初告裁判院長ハ陪審人名簿ヲ拾集シ十一月中
ニ特別ノ委員ヲシテ管内ノ毎年名簿ヲ編成セ
サルハカラス此委員ハ初告裁判院長若クハ其
代理人及ヒ初告判事若クハ地方判事中ヨリ撰
舉セシ判事三名及ヒ人民ノ名望アルモノ三名
ヲ以テ之ヲ結立ス但シ此委員ハ初告裁判院長

皆之ヲ撰任ス委員長ハ其集會ヲ其國ノ政府ニ
報知シ政府ヲシテ代理人ヲ派遣スルヲ得セシ
△代理人ハ所見ヲ陳述スルヲ得ルト雖モ投票
ニ関スルヲ得ス

陪審人名簿ニ関シ告訴ヲ為スモノアレハ委員
之ヲ検査シ尋テ陪審人毎年名簿及ヒ陪審補毎
年名簿ヲ論定ス此名簿ヲ論定スルニ就テハ其
最モ陪審ニ適當セリト信認スル所ノ者ヲ撰拔
スルヲ要シ且ツ陪審補名簿ハ重罪裁判院所
在
地ニ住居スル者ノミヲ取テ之ヲ縮成スルヲ善
シトス

出板犯罪ニ関スル千八百六十九年五月九日ノ
墺國法律ハ佛國ノ法律ト大ニ異ナル事項アリ

法省

蓋シ墺國ニ在テハ名簿ニ記載スヘキ陪審人ノ
數ヲ定ムルハ佛國ノ如ク人口ニ原ツカスシテ
翌年ノ必須ナル數ヲ推測シテ之ヲ定ムル是レ
ナリ凡テ各人名簿ニ記載スヘキ陪審人ノ數ハ
平常及ヒ臨時集合ノ為メニ必須ト推測スヘキ
人員ノ一陪ト為ス

右ノ規則ヲ遵守シテ人名簿ヲ編成スルハ人
員不足ヲ生スルコトアリ故ニ一裁判管内ノ人
名簿通計八百名ニ達セサルハ初告裁判院長
其撰任セシ特別委員ノ集合セサルニ先タテ各
區長ニ命シテ追加名簿ヲ編成セシムルヲ要ス
而シテ追加名簿ニ記載スヘキモノハ直税五フ
ロラン以上ヲ納ムルモノヲ取ル最モ陪審人々

ルニ緊要ナル事項ヲ具備スルヲ要ス
右ノ方法ニ依テ編成セシ毎年名簿ニ於テ又毎
會名簿ヲ編成ス嘗テ民撰議院ニ送致セシ政府
ノ法案ハ每會名簿モ亦毎年名簿ノ如ク特別委
員ヲ置テ之ヲ編成セシムヘシト云ヘリ然レモ
民撰議院ハ選撰法ヲ以テ每會名簿ヲ編成スル
キハ自ラ陪審人ノ不羈ヲ妨碍スヘシト思惟セ
リ故ニ抽籤法ヲ以テ之ヲ編成スルニ決議セリ
陪審集會ノ前十五日初告裁判院ニ於テ判事二
名及ヒ按事ノ參坐ニテ公然抽籤法ヲ行ヒ每會
名簿ヲ定メ又抽籤ノ時日ヲ代官人事務局ニ報
告シテ其社負一名ヲ派遣參會セシムルヲ得セ
シム

法律省

又各事件ニ就キ抽籤ヲ以テ陪審組ヲ結立ス其
方法規則ハ新法典中ニ之ヲ明載セリ(第三百四
條及ヒ其次條)
重罪裁判院ハ陪審人ヲ設クルノニ止マラス
且ツ佛國ノ如ク三名判事ヲ置ク重罪裁判院長
ハ大体控訴院長ヲ以テ之ニ任セシメス多クハ
重罪裁判院所在地ノ初告裁判院ノ長ヲ以テ之
ニ任ス(第三百二十一條)蓋シ立法家ハ裁判官ノ
移轉ヲ豫防セシナリ何トナレハ移轉ハ判事ヲ
シテ空シク時日ヲ曠過セシムルノ害アレハナ
リ此方法ハ佛國ニ於テ各州ノ重罪裁判院ヲ管
セシムルニ控訴院所在地ヲ除ク外ハ該院ノ
長ヲ以テヤスレテ重罪裁判院ノ設置地ノ民事

あや

裁判所ノ長ヲ以テスルノ方法ニ應當スヘシ
重罪裁判院ノ判事ヲ三員ト定メタルハ最モ著
眼スヘキ要領ナリ何トナレハ陪審ノ權限ニ屬
セサル犯罪ヲ擔任スル初告裁判院ハ判事四員
ヲ以テ議ヲ決ス而シテ其所見相半スルハ犯
人ヲ放棄ス故ヲ以テ此判事ヲ四員トセシ偶數
ハ犯人ノ利益ノ爲メニ之ヲ許可セシモノナリ
然レハ重罪院ノ如キハ陪審人アルハ判事ハ
罪ノ有無ヲ決スルモノニ非シテ刑律ヲ擬定
スルヲ任スルカ故ニ立法家ハ投票ノ互半ヲ生
セシムヘカラスト思惟セリ
千八百七十三年ノ法典中ニ再々陪審ノ結立ヲ
許可セシニ當リ民撰議院ハ後來其弊害アラシ
コトヲ慮リ之カ爲メニ特別ノ法律ヲ投票決定
シ千八百七十三年五月二十三日新法典及ヒ陪
審人名簿編成ノ法律ト同時ニ之ヲ布告セリ此
新法ヲ號シテ陪審停止法律ト稱ス
陪審停止律ハ特別ニ定示セシ國內ニ於テ陪審
ノ權限ニ関スル諸犯罪若クハ唯數種ノ犯罪ニ
就テ陪審ノ實施ヲ停止セシムルモノナリ但シ
此停止ハ一ケ年ヲ越ユルヲ許サス
陪審停止ヲ爲スヘキ場合アルハ各省ノ卿會
合シテ大審院ノ所見ヲ問質シ然ル後之ヲ公告
スヘシ但シ諸卿其責ニ任ス行法權ニ斯ノ如キ
至大ナル処分ヲ委任シテ立法權ヲシテ之ニ関
係セサラシメサルハ法律ノ固ヨリ望マサル所

ナリ乃テ政府ハ此命令ヲ布告スルヤ直々ニ之
ヲレイニスケラレシノ民撰議院及ヒ貴族院ニ報
告セサルヘカラス若シ議院分散中ナレハ次會
ヲ待テ之ヲ報告スヘシ而シテ議院ヨリ之ヲ要
求スルキハ何時ニテモ命令謄寫書ヲ送呈スル
ヲ要ス且ツ屢々陪審停止ヲ延捱保續スルノ害
アラシコトヲ恐レ法律ハレイニスケラレシノ議
院再會ノ期ニ至ルマテハ之ヲ重複シ若クハ延
捱スヘカラスト定言セリ
陪審停止ヲ發言セシキハ陪審停止ニ係ル犯罪
ハ初告裁判院ニ於テ之ヲ擔任審理ス然ルキハ
判事ハ四名ヲ以テ定員トナス而シテ死刑若ク
ハ五年以上ノ囚獄刑ニ當ルヘキ犯罪ニ関スル
中ハ刑事六頁ヲ以テ之ヲ審理スヘシ
新法典中ニ揭示セシ審査ノ諸規則ハ地方裁判
所ニ於テ一名ヲ判事註違罪ヲ審査スルニ於テ
モ亦概子之ヲ施用ス然レモ註違罪ノ審査ト輕
重犯罪ノ審査トノ間ニ於テ數種ノ差異アリテ
其最モ著ルシキモノハ上訴ノ順序ナリ蓋シ吾
輩既ニ之ヲ陳述セルコトアリシ如ク註違罪ハ
有罪ノ問題ト雖モ之ヲ上訴スルヲ得然レモ破
毀上告ヲ爲スヲ許サス何トナレハ上告ヲ許ス
ヘキ原因アル片ハ初告裁判院ニ之ヲ控訴セシ
ムレハナリ
通常ノ裁判ニ於テハ犯スヲ面質シ若クハ先ツ
呼喚狀ヲ發遣セシ後々ニ非サレハ之ニ刑ヲ科

三十一

スルヲ得ス然ルニ註違罪ニ於テハ速決審理ヲ
為スヲ得即チ呼喚状ヲ發遣スルコトナリ又ハ
被審人未タ出庭セサル片ト雖モ刑罰ヲ宣告ス
ルヲ得ヘシ此種ノ吟味ハ日耳曼ノ諸國ニ之ヲ
施行シ稱シテコンタスヘルフレント云フ(第四
百六十條及ヒ其次條)蓋シ立法家ノ説ニ裁判ヲ
速決シ犯人ニ出庭ヲ避ケシムルノ利益ヲ有セ
シムルト雖モ後日不服ノ上訴ヲ為スノ權ヲ犯
人ニ付與スル中ハ決シテ弊害ヲ構成スルコト
ナシト則チ此上訴ハ命令書發告ノ日ヨリ八日
ヲ限リ之ヲ地方裁判所ニ致スヲ要ス然ル片ハ
該裁判所ハ平常ノ規則ニ準シテ之カ審査ヲ為
ス

司法省

法典ノ註違罪ニ関スル分部中最重ナル問題ハ
裁判官結立ノ問題ナリキ則チ千八百六十七年
ノ政府ノ法典草案ハ(第四百七十六條)地方判事
一名关ニ區ノ参事二名ヲ以テ註違罪ヲ檢案セ
シメ同見ノ上判決ヲ宣告セシムヘント決言セ
リ然ルニ民撰議院ノ委員ハ千八百六十九年ノ
報告書ヲ以テ参事裁判ノ主義ヲ駁撃セリ其説
ニ曰ク各種人員ノ集合ヲ以テ裁判ヲ為ス片ハ
決シテ好結果ヲ得ウラン且ツ参事裁判ハ一体
ノ判事ノ如ク不羈獨立ノ保護ヲ受有セスト
國法典ハ乃チ千八百六十九年ノ委員ノ所見ニ
依憑シテ参事裁判ノ主義ヲ許可セス判事一名

九

ヲ以テ地方裁判所ニ於テ註違罪ヲ判決セシム
ルニ決セリ
抑々臨時裁判所ハ墺國法典ニ於テハ之ヲ許可
セスト云フモ不當ニ非サルヘシ何トナレハ特
別ノ場合ニ在テ犯罪ヲ吟味スル爲メニ特種ノ
裁判所ヲ設置セサレハナリ
然レモ千八百七十三年ノ法典ハ第十八紀ノ中
葉ヨリ既ニ墺國ニ施行セレ規則ニ還復シテ非
常ノ場合ニ在テハ一層速決ニ最酷ナル方法
ニ就テ裁判ヲ爲スヲ許可セリ此速決非常ノ裁
判ハ初告裁判院ニ於テ之ヲ擔任セシム然ルモ
ハ該裁判院ハ陪審ノ權限ニ屬スル犯罪ト雖モ
之ヲ主任シ名ケテ臨時裁判院ト謂フ此裁判所
ハ一種ノ場合ニ當テ之ヲ関クヲ得即チ聚衆行
兇アリテ平常裁判ノ方法ヲ以テ之ヲ懲罰シ得
サルモ若クハ一區或ハ數区内ニ殺害掠奪放火
若クハ暴行妄作シテ人心ヲ騷擾セシムルモ是
レナリ(第四百二十九條及ヒ第四百三十條)
此裁判ヲ施行セントスルモ特別ノ發令ヲ要
ス即チ聚衆行兇ノ場合ニ在テハ縣令ハ控訴院
長及ヒ該院ノ檢事ヲ協議セシ後々之ヲ發令ス
他ノ場合ニ在テハ内務卿ハ司法卿ト合議セシ
後々之ヲ發令スルヲ得
此發令ハ犯罪地ノ初告裁判院ヲシテ陪審ヲ放
棄セシ所ノ犯罪ノ裁判ヲ擔任セシム假令軍人
ト雖モ該裁判院ニ於テ其罪ヲ審問シ而シテ裁

ラナシ

判ノ速結ヲ要スルカ爲メニ現行犯罪若クハ速
カニ承服セシムヘシト認メタル罪人ニ非サル
ヨリハ之ヲ該裁判院ニ拘致スルコトナシ然レ
トモ此場合ニホテモ一體ニ犯人ニ附與セシ保
護權ヲ剥奪セサルハ贅言ヲ待タサルナリ
裁判ハ凡テ公庭面質ヲ以テシ犯人ハ防護人一
名ヲ具備スルヲ要ス若シ之ヲ具備セサル片ハ
官之ニ一名ヲ指示セサル可ラス
若シ列席裁判官一同犯人ヲ有罪ト發言スル片
ハ死刑ヲ宣告セサルヘカラス死刑ヨリ軽減ナ
ル刑罰ヲ科スルハ唯特別ノ場合ニ在ルノニ蓋
シ臨時裁判院ハ五年ヨリ二十年ニ至ルノ禁獄
刑ヲ科スルヲ得其場合左ノ如シ 一犯罪ノ際
刑 法 省
齡滿二十年ニ至ラザリシ者 一最重罪ノ犯人
一名若クハ數名ヲ死刑ニ處セシヲ以テ既ニ社
會ノ安寧ヲ回復スルヲ得シキ特別ノ情狀ヲ酌
量スヘキ最輕ノ罪人是ナリ然レモ若シ犯人特
別ノ場合ニ在ラス且ツ判事一同科刑ヲ發言セ
サルカ若クハ三日内ニ判決ヲ爲ス能ハサル中
ハ臨時裁判院ハ其事件ヲ平常裁判院ニ送致セ
サルヘカラス
臨時裁判院ノ宣告セシ死刑ハ其裁判ノ如ク速
カニ之ヲ決行セサルヘカラス決シテ該裁判所
ノ判決ニ對シテ上訴ヲ爲スヲ許サズ死刑ハ宣
告後二時ニ之ヲ決行スルヲ要ス(第四百四十五
條)

三十一三

臨時裁判院ヲ閉クニ特別ノ決議ヲ要スル如ク之ヲ閉ツルモ亦特別ノ決議ヲ要ス(第四百四十六條及ニ其次條)

吾輩ハ此ニ千八百七十三年ノ墺國治罪法ノ銓解ヲ終結セントス此至重ナル立法書中ニ於テハ固ヨリ無限ノ着眼ヲ要スヘキ事項アルヘシト雖モ吾輩今之ヲ概略セリ何トナレハ讀者若シ吾輩ノ銓解ヲ反覆シ以テ日耳曼原書ヨリ譯出セル該書ト之ニ附加スル所ノ註解トヲ熟讀スル片ハ銓解ノ不足ヲ補フヲ得ヘシ

新法典ハ事項ニ因テハ級密ニ其枝葉ヲ指示スルヲ以テ(凡テ外國ノ法律ハ枝葉ヲ明示スルヲ以テ佛國ノ法典ト其性質ヲ異ニスルモノ多シ)

司法省

殊更ニ原文ヲ熟讀スルヲ要スル所以ナリ審理ニ就テ曲テ負ヒタル者ヨリ納ルヘキ費用中ニ算入スヘキモノヲ細々記載シ(第三百八十條及ニ其次條)及ニ殺害放火詐偽等ノ審理中ニ法官ノ猛省スヘキ特別ノ規則ヲ級密ニ指示セシ如キ即チ是レナリ(第百二十七條)

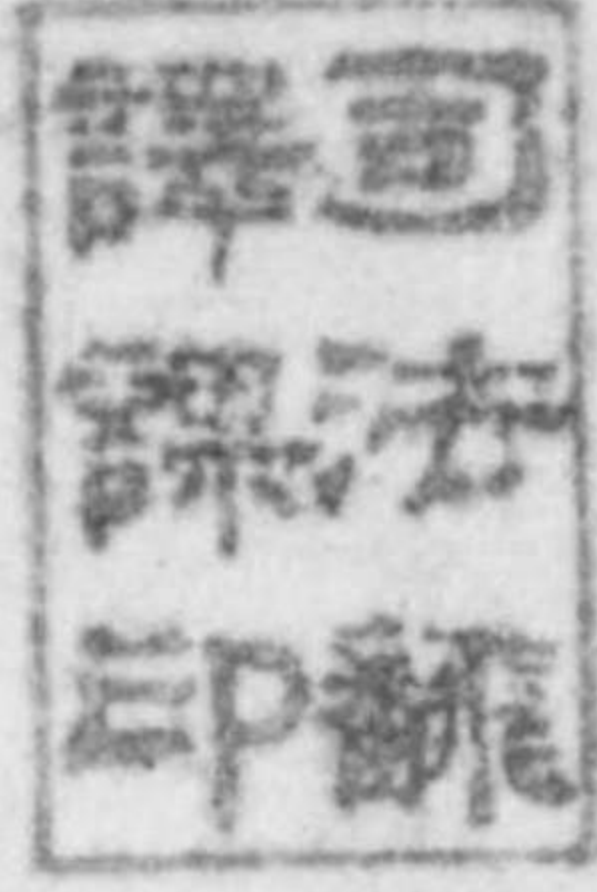
千八百七十三年ノ法典ノ脱稿ハ現今在職ノ墺國司法卿グラビール氏(維也納大學校ノ舊法律學教官)ノ功最モ多キニ居ル此卓越タル刑律家ニシテ司法卿ノ職ヲ以テ新法典ノ制作ヲ贊成セリ而シテ其法案編輯ニ就テハ同氏ハ其著書及ニ臨時委員ノ職務ヲ以テ之ヲ輔翼セシヤ其功績實ニ大ナリキ

澳國ノ沿革法ハ實ニ千八百三十三年ノ法典ヲ
以テ大成セリ然レモ是レ唯ク刑律中ノ一部々
ルニ過キス其刑法ト稱スルモノヲ亦大ニ改革
セサルヘカラサルナリ
グラゼール氏ハ現今澳國刑律改革ノ大事業ヲ
竣成セリ則千八百七十四年十一月七日ノレイ
スをラリ左民撰議院ノ集會ニ刑法ノ草案ヲ呈
致セリ蓋シ之ヲ以テ現今施行ノ千八百五十二
年ノ刑法ニ代用セント欲スルナリ

查理里温 加園氏識ス

用 様 省

海法書

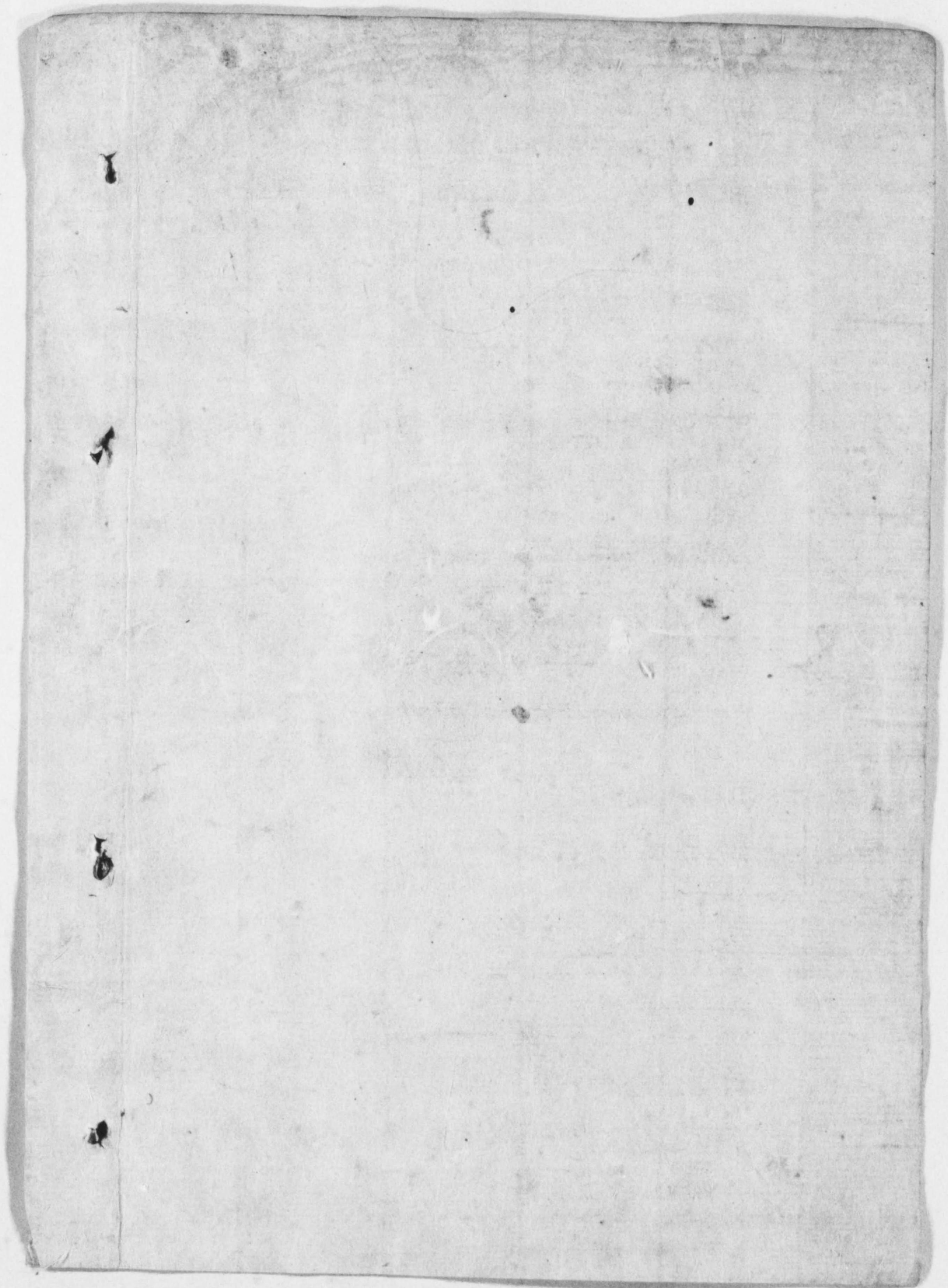


自吉系
至二百廿七系

三
號上句

周布公平譯

奧國治罪法
自吉卷
至四卷



司
法
譯
印

周布公平譯

奧國治罪法
一

司
法
省

○此法律ハ
治罪法
録第十七篇
第十九號ニ
關スル
法律

治罪法施行ニ関スル
十三日ノ法律
註曰、^{（百）} 此法律録第十七篇第十九號ニ此法律ヲ掲載シ、^{（百）} 治罪法ノ條目ヲ登記セリ

第一條此治罪法ハ布告ノ後、^{（百）} 六個月ヲ經テ、^{（百）} 裁判所ニ於テ施行スヘキモノトス、^{（百）} 此限ニ在リテ、^{（百）} 裁判所ハ、^{（百）} 重罪、^{（百）} 輕罪及

其ノ他ノ諸犯罪ニ關スル訴訟手續ノ規則ヲ制定スル也、ル布也

註曰、^{（百）} 填國治罪法ハ千八百七十三年六月三十日之ヲ布告シ、^{（百）} 千八百七十四年一月一日ヨリ之ヲ施行セリ

第二條治罪法施行ノ後、^{（百）} 司法律省ニ關スル

古律ハ左ノ數條ヲ以テ定メタル分限内ニ在ラサレハ之ヲ施行スルヲ得ス

註曰、^{（百）} 此條一般普通ニ許可スル所ノ^{（百）} 罰金ナリ、^{（百）} 罰金ナルモノハ其布告前ノ犯罪上ニモ亦^{（百）} 適用スヘキモノナリ、^{（百）} 第三條第四條ハ既ニ此條ニモ掲載セル如ク、^{（百）} 一般^{（百）} 刑罰ニ適用スル特別ノ規定ヲ設立セリ

第三條若シ此法典施行ノ期限前ニ在テ法官訴訟停止ノ^{（百）} 裁判（アインステンダス、ベシユル！ス）^{（百）} 若クハ^{（百）} 罪犯ノ^{（百）} 裁判（アインステンダス、ベシユル！ス）^{（百）} 若ク

控訴上告等ヲ為セシモノアルキハ控訴院及ヒ大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

控訴上告等ヲ為セシモノアルキハ控訴院及ヒ大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

大審院ハ舊律ニ依テ之ヲ處断スヘシ

乙左ニ開列セル重罪及ヒ輕罪

第一叛逆重罪(千八百五十二年五月二十七日
布告セリ)刑法第五十八條ヨリ第六十一條ニ
至ル及ヒ千八百六十二年十二月十七日布告

ノ法律第一條ニ參見ス(正條ヲ掲クル)
註曰此項及ヒ左ノ數項ニ列証セル刑法ハ
アルゲノイ子ス、ストラフゲゼットト題スル

千八百五十二年五月二十七日(刑法ナリ
然レ此刑法ハ既ニ廢止スル)正ヲ加ヘ
タリ即チ其一例ヲ擧ケンニ囚ニ加フル

施體ノ刑答類(刑法第十九條)ハ千八百六十
七年十一月十五日ノ法律ヲ以テ既ニ之ヲ
廢セリ

司法省

千八百七十四年十一月七日レヒスラー

トノ民撰議院ニ刑法草案ヲ差出セ

ト(談書叙文中ニ就テ之ヲ)ルヘシ

第二(一)民ノ安寧ヲ妨害スルコト(刑法第六十

五條六十六條及ヒ千八百六十二年十二月十

七日ノ法律第二條)

第三(二)乘機ノ害ヲナスコト(第六十八條ヨ

リ第七十三條ニ至ル及ヒ七十五條)

第四左ニ開列セル各種ノ兇犯暴行

公會及ヒ裁判所其他ノ諸官署ヲ暴害スルコ

ト(第七十六條七十七條及ヒ八十條)

官許ノ會社及ヒ官吏ノ參會若クハ監察ヲ為

セ(第七十八條七十九條八

公事ヲ決
議スル爲メ
政府ヨリ任
タル集會
裁判所
其他ノ官署
ニ對シ暴行

十條

人ノ所有物ヲ毀損セシ暴犯(第八十五條)

條及危險ノ場合ニ在テ惡意ヲ狹シテ事ヲ

為レ若クハ為スヘキノ事ヲ為サ、ルヨリ起

リシ罪犯(第八十七條)但罪犯ノ場合如

何ヲ論セス刑法第八十六條ノ第二項ニ揭示

セル犯場合一ヲ生セレハニ限ル又刑法第八

十五條ノ一及ヒセ項元ニ(第八十七條ニ揭示セ

ル場合ニ在テハ危難ノ輕重若クハ惡業ノ大

小ニ準レテ原告人ヨリ禁獄五年以上ノ刑ヲ

求メタルハニ限ルモ、トス(第九十條九十一條)

處女ヲ擄奪スルコト(第九十條九十一條)

奴隸ヲ質買スルコト(第九十五條)

拘捕(第九十六條九十七條)法律ニ依リ禁獄五年

以上ノ刑ニ係ルモ、ニ限ル(第九十七條)

第五官吏私擅權ノ公權ヲ犯スコト(第一百一條ヨリ

第一百三條ニ至ル)

第六偽造(第一百六條ヨリ百十七條ニ至ル)

第七偽造(第一百八條ヨリ百二十一條ニ

至ル)

第八宗教ヲ犯スコト(第一百二十二條及百二

十三條)但百二十三條ニ依リ危難ノ輕重若ク

ハ惡業ノ大小ニ準シテ原告人ヨリ禁獄五年

以上ノ刑ヲ求ル場合ニ限ル(第一百二十七條ニ至

第九強姦(第一百二十五條ヨリ百二十七條ニ至

ハ加重スルニ
 模倣ヲルニ
 因テ告訴状
 中ニヨリテ
 五年ノ以テ
 徒刑場内
 於テ役
 六カ月
 申渡スル
 別段
 限ル

風淫ヲ免スル罪

第十犯姦(第百二十八條)但第百二十六條ニ掲 載セシ結果ノ一ツ生セシハ起シ禁獄ニ 重大ナル罪況ヲ奉ケ禁獄五年以上ノ刑ヲ求 メシハ限ル 徒刑場内ニ於テ復役スル	第十一難姦(第百二十九條)但第三十條第二項 ニ豫示セル場合ニ限ル	第十二謀殺及ヒ故殺(第百三十四及ヒ百四十 三條) 過誤殺	第十三母ノ承諾ナキ墮胎(第百四十七及ヒ百 四十八條)但法律ニ於テ五年ヨリ十年ヨリ至ル 禁獄ニ處スル場合ニ限ル	第十四棄兒(第百四十九條及ヒ百五十九條)但 法律ニ於テ五年ヨリ十年ヨリ至ル禁獄ニ處 スル場合ニ限ル 徒刑場内ニ於テ復役スル	第十五重傷(第百五十二條ヨリ百五十七條)至 ル但法律ニ於テ五年ヨリ十年ヨリ至ル禁獄ニ 處スル場合ニ限ル 場内ニ於テ復役スル	第十六二人格闘(第百五十八條)至ル但法律 ニ於テ禁獄五年 以上ノ刑ニ處スル場合ニ限ル	第十七放火(第百六十六條ヨリ百六十九條)至 ル但禁獄五年以上ノ刑ニ處スル場合ニ 限ル 徒刑場内ニ於テ復役スル	第十八竊盜(第百七十一條ヨリ百七十六條)至 ル但五年ヨリ十年ヨリ至ル禁獄ニ處スル 場合ニ限ル
---	-------------------------------------	------------------------------------	--	--	--	--	---	--

第十九條 信用ニ背信スル者ノ罪ニ至ルコト (第百八十

一條ヨリ) 但法律ニ於テ五

年ヲ禁獄ニ處スヘキ場合及ヒ原告

刑法第百八十四條ニ照憑シテ重大ナル罪況

ヲ禁獄五年以上ノ刑ヲ求メシトキニ限ル

第百九十五條ニ至

ル但法律ニ於テ禁獄五年以上ノ刑ニ處スヘ

キ場合ニ限ル

第百九十七條ヨ

リ二百四條ニ至ル

第百九十九條及ヒ二百十條(但原

告訴狀ニ二百十條アリ及ヒ七項ニ記載セシ場合

中ノ一ヲ記シテ禁獄五年以上ノ刑ヲ求メシ

片ニ限ル

第百九十七條及ヒ二百十條(但第

二百十條ニ依テ五年ヨリ十年ヲ禁獄ニ至ル

處スヘキ場合ニ限ル

第百九十九條及ヒ二百十條(但第

二百十條ニ依テ五年ヨリ十年ヲ禁獄ニ至ル

處スヘキ場合ニ限ル

第百九十九條及ヒ二百十條(但第

二百十條ニ依テ五年ヨリ十年ヲ禁獄ニ至ル

處スヘキ場合ニ限ル

第百九十九條及ヒ二百十條(但第

二百十條ニ依テ五年ヨリ十年ヲ禁獄ニ至ル

桃撥

の管轄

在ラハ緊重

第

第七條 正規ニ日陪審裁判ヲ停止ヒシ地方

上ノ裁判ヲ施スルハ其ノ中ニ陪審裁判ヲ行ハス

要トナル罪ヲ為ス裁判所ハ必ず禁獄五年以

右ノ條規ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第十七日ノ法律第百三條及ヒ第百四條

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

第百二十五條ニ依テ陪審ノ置キ決スルコト

第百二十四條政府ノ定議ヲ專斷スルコト及ヒ暴

起(刑法第百三條及ヒ第百六十二年十二月

テニニ以テ
ナク思置
ナク思置
ナク思置

ラゼトト氏千八百七十三年ニ
大文檢事ニ送致シ新法典施行ニ
ル布連書ハ猛獄セサルカラス此
則チ檢事局ノ義務ト權利トニ
關係セラル

司法省

條

條ニ至ル第三百十二條ヨリ第三百三十條
第百四十七條ヨリ第百八十四條ニ至ル

ニ於テ刑スヘキ重罪輕罪及ヒ護謫罪ニ関スル

事及ヒ千八百六十二年十二月二十六日ノ法律

律ニ千八百五十二年十月二十四日ノ法律

ニ於テ罰スヘキ犯罪ニ関スルハ該法典

第百七十七條ニ定メタル四十八時間ノ

内ニ於テ放還スル事ニ関セバ又保釋金ヲ以テ

百九十四條ニ至ルノ規則ガ停止ス又警察

官吏ハ第百四十一條ノ官法ニ拘ルコトナ

ク何時ニテモ司法官ノ命ヲ待タズ犯人ノ

住所又檢探スルヲ得又犯人未タ逮捕ニ就カ

ス其住所モ未タ檢探シ得スト虽モ司法官ノ

許可ヲ經スレテ書翰ヲ勒留シ若クハ之ヲ関

封スルヲ得

第二條刑事ノ出獄ハ必ス原告人ノ請求ニ

因ルコトヲ要ス

註曰ク此文中原告人ノ字意ニテ廣シ即チ公告

押チ檢アリ又私告者被テ廣シ即チ原告人ト

為ル此新治罪法ハ其定ムル所ノ原告人ト

為ル親就種々ノ成案ヲ措成セリ既ニ之ヲ

新聞中ニ陳述ス読者亦書中ニ就テ見ルヘシ

千八百六十七年七月二十五日ノ諸卿責任

関スル法律ニ於テハ諸卿職務上ニ於テ罪犯ヲ

同敷ルハレトガストラートノ西議院ニ属ス

依ルハ民事ノ為ニシテ

(出訴スルヲ得ザル)

刑法ニ依リテ裁判ト因ラサレハ刑罰ノ適用ス可キナル

事件ヨリ刑罰ノ適用スル方法ハ私告ニ関スル規則ヲ以

テ之ヲ定ム

其他ノ刑事ハ凡テ公告ニ関シテ検事局之ヲ掌シ

而レテ検事局欠クル片ニ第四十八條ニ豫示セ

ル場合ニ在テハ被告ノ代理人ニ代ルヲ得ヘシ

刑事裁判ハ皇帝ヨリ命令スル片若クハ既ニ其裁判ヲ為

ス可ラスト命令スル片ハ則チ

レハ之ヲ停止スヘシト命令スル片ハ則チ

註曰此項ハ千八百六十七年十二月二十一日

憲法中司法官權ニ関スル第十三條ニ依リテ

該條ハ皇帝ノ治罪調査ヲ禁止シ或ハ之ヲ停

止スルノ權ヲ定ムルコトヲ本書ニ讓レリ

此項ニ見ル如ク皇帝赦罪ノ權ハ刑事ニ止リ

民事ニ及ブモノニ非ス然レハ民事檢察局ニ

代リ原告タル片ハ素ヨリ此權ヲ施スモ妨ナ

シ何トナレハ此場合ニ在テハ民事檢察局即チ

刑事檢察局ニシテ何時タリトモ檢察局之ヲ回

第三條刑罰ノ適用ニ関スル諸官吏ハ犯人ノ事情

ニ涉ル者ハ其利害ヲ問ハス一昧ニ之ヲ播聚ス

ルヲ要ス且ツ該特別規則ナカラシムトモ

其權利ヲ侵害ス

註曰第四百一十二百八十三百六十八三百四十條

及ヒ第四百六十一條ノ第四項ハ犯人ノ權利

ヲ本人特告知ス

第四條 原告人ノ請求ニ其損害賠償金ノ訴ア

之ヲ刑事ト同時ニ處分スルコトヲ得

時日ヲ費スルコトヲ得 民事裁判官ニ送

註曰ク千八百三年ノ法典(第五百二十二、五百二

十四條)ハ刑事裁判官ニ對論終極ニ在ラ

告、損害ノ金額、及ヒ其被害タルコトヲ審

シ得ル片ニ原告人ノ權利ヲ定ムルコトノ推

テ有ストセリ又千八百五十年ノ治罪法(第四

條)四百一條)ハ刑事裁判所ニ於テ原告利益

ヲ審理スルハ其請求ニ由リ且審理上ニ緊要

ナル諸証具ヲ備ルトキニ限ルトセリ又

司法省

千八百五十三年ノ法典ハ佛國法典ニ模擬セ

レ千八百五十年ノ法典ト異ナリ即チ此法典

ハ犯罪ヨリ生ゼシ損害及ヒ他民事ニ関ス

ル諸結果ハ審理ニテモ又討論上ニテモ原告

ノ請求ヲ待タズシテ之ヲ調理シ其問題ヲ取

極メルコトヲ要ストセリ 註曰ク

治罪法ニ由テ原告ハ第四條ニ定メタル規則

ニ準シ刑事裁判所ニ損害賠償金ヲ申請スル

コトヲ得又原告人ヲシテ此權利ヲ行使スル

得セシメシガ如ク第百七十二條ハ原告人

其証佐ヲ裁判所ニ申告スルハ裁判官ハ原告

人ニ就テ損害賠償金ヲ請求スルコトヲ問フ

ヲ要ストセリ(三百六十五條ヲ見ルヘシ)原告

此訴訟ヲ為スノ權利ハ本訴論ハ初始ナル之
ヲ行フヲ得ヘシ然ルモハ民事原告ト
見做ス也故ニ第五章ニ詳細揭示スル至
推利ヲ有スル者トス

民事裁判ハ第二十一章ニ就テ之ヲ見ルヘシ

第五條刑事審理及ヒ裁判ヲ任セラレシ

ノ權限ハ民事審理ノ疑案上ニ及フモノトス然

レ氏民事上ノ裁決ニ至テハ刑事裁判官ヲシテ

其處分ニ関涉セシムルモノニ非ス

然リト雖モ其疑案ガ結婚ノ可否ニ關係セシモ

ノナレバ民事トシテ裁判セシ事ガ即チ刑事裁

判ノ憑基タルヲ要ス若シ民事裁判ノ決裁ヲ為

サスレテ尚ホ審理中ニ在ル片又ハ犯罪ノ事情

結婚ヲ禁スルヘキ條目ニ觸レ訴訟人ヲ待タス

シテ糾問スヘキモノノ刑事裁判官糾問ヲ

申請シタル片ハ其審理ニシテ民事裁判官ノ決

裁ヲ終ルマテ結婚ヲ誓延スルヲ要ス而シテ此

決裁ハ事宜ニ由テハ急速ニ之ヲ為スヘキモノ

トス

第六條此法典ヲ以テ定メタル結婚ノ延期ハ特

殊ノ規則ヲ除クノ外其數ヲ増加スルヲ得ス而

シテ誓延ノ期日中ニ其知日ヲ算セス日曜日祭

日及ヒ書類ヲ裁判所ニ取集タル為メ必用ナル

日數ハ之ヲ其中ニ算入ス

註曰第三百六十四條ハ控訴スヘキ期限ノ既

ニ尽キタルヲ再々ト限定スルコトヲ特別ニ

司法省

ス

許可セリ
依テ申渡サ

第七條 此法典ニ依テ命ジレシ贖罪金ヲ犯罪

人完納スルコト能ハサルハ贖罪金五フロウ

シ大貨弊ノ各一十戈ニ当ルハ毎ニ改メテ一日間ノ

拘留ニ貶漸ク若シ贖罪金ヲ完納スルカ为メニ

生活ノ資本ヲ喪ト或ハ窮迫ニ致サレムルハ

犯罪人ノ自ラ此改罰ヲ願フコトシ許ス凡テ贖

罪金ハ囚徒ヲ放還スル片ニ方テ其困究アル者

ハ之ヲ救恤シ以テ適宜ノ職業ニ就カレムル

コトニ充満ク此費用ノ方法ハ皇帝ノ命令ヲ以

テ之ヲ定ム

第二章 裁判所ノ事

第八條 刑事ニ就キ裁判ノ権ヲ有スルモノ左ノ

司法省

如シ

第一項 地方裁判所

第二項 初告院

第三項 陪審裁判院

第四項 控訴院

第五項 大審院

各刑事裁判所ノ権ハ此法典ニ依テ設置セシ特

別各規ヲ第六十條及七十一條除クノ外全ク

其管轄及ヒ中下等寄留セル人民止ニ及フ凡テ

刑事裁判所ニ勾喚サレシ者ハ該所ニ出衛レ其

疑問ニ對シ命令ニ従順セサル可テス

第一款 地方裁判所ノ事

第九條 地方裁判所判事ノ権限左ノ如シ

六二〇八、二二五、二二六、二二七、
三百五十二、四百十六、四百二十五、
諸條ヲ見

評議局ハ新設ノモノト謂フハ何トナレハ

新法ニ由テ初告院裁判官ヨリ組成スル所ノ分

課ニノイ附屬スヘキ職務ト雖モ千八百五十

三年ノ治罪法ニ依レハ全ク初告院ニ屬

轉置スレハナリ評事局原告人ヲ審問セシ後ニ重

罪及ヒ輕罪ノ事件ニ就キ審理及ヒ檢証ヲ為ス

コトヲ以テ其管内ノ地方裁判所ニ轉委スルヲ

得ヘシ然レモ何時ニ限ラズ其事件ニ回繳スル

コトヲ得又原告人或ハ犯罪人ヨリ之ヲ願フ

ハハ七カ月間スルコトヲ要ス

評事局ハ裁判官三ノ集合ニテ其裁決ヲ為ス

第十三條初告院ノ推限内ニ屬スル者左ノ如シ

第一項福審裁判院ノ推限内ニ在ラサル重罪

及ヒ輕罪ノ受理ニ裁判
第二項地方裁判所ノ判決及ヒ指令ニ服スル
ト控訴ノ受理ニ裁判
右二項ノ場合ニ在テハ初告裁判所ハ裁判官三
ノ集合ヲ以テ成ル
此法典ニ依テ初告裁判所刑事上ノ判決ハ唯其
罪實ニ関スルモノヲ除クノ外凡テ裁判官三
ノ集合ヲ以テ之ヲ為ス但特別ニ是則ヲ設立ス
ルハ此限ニ在ラス

法律第... 條

註曰第三百五十七、四百一、四百十、四百十一、四百
百三十三條ハ事件ノ原質ニ関スル者ニアラ
スト、田氏裁判官四名ヲ要スルノ一、馬トヲ揭示
セリ

第三款陪審裁判院ノ事

重罪

第十四條 第十九章ノ成律ニ拠テ設立セシ陪審
裁判院ハ此法典施行上ノ法律ヲ以テ本院ニ送
致スルハキ重罪及ヒ輕罪ノ受理共ニ裁判ヲ擔任
ス

第四款控訴院ノ事

裁

故

第十五條 控訴院ハ評事局ノ判決ニ服セサル控
訴人トシテ再審請求不服ヲ受理シ且チ第二百
八十三條、第百、四十三條ヲ以テ許可セシ諸控訴

司法省

ヲ受理ス又其管内ノ刑事裁判所ノ處分管理ノ
権ヲ有シ其處分上ヨリ生セシ諸控訴ヲ受理ス
但シ其處分裁判所ニ上訴スルヲ得サルモノニ係
ルトキ或ハ他ノ刑事ニ由テ上訴スルハ
此限ニ在ラス控訴院ハ裁判官五名集會ヲ以
テ其裁決ヲ為ス

註曰此他ノ職務ハ第三十九、四十、五十九、六十
六十一、六十四、七十四、九十九、百一十、百一十五
百一十六、百一十七、百一十八、百一十九、百二十
百二十一、百二十二、百二十三、百二十四、百二十五
百二十六、百二十七、百二十八、百二十九、百三十
百三十一、百三十二、百三十三、百三十四、百三十五
百三十六、百三十七、百三十八、百三十九、百四十
百四十一、百四十二、百四十三、百四十四、百四十五
百四十六、百四十七、百四十八、百四十九、百五十
百五十一、百五十二、百五十三、百五十四、百五十五
百五十六、百五十七、百五十八、百五十九、百六十
百六十一、百六十二、百六十三、百六十四、百六十五
百六十六、百六十七、百六十八、百六十九、百七十
百七十一、百七十二、百七十三、百七十四、百七十五
百七十六、百七十七、百七十八、百七十九、百八十
百八十一、百八十二、百八十三、百八十四、百八十五
百八十六、百八十七、百八十八、百八十九、百九十
百九十一、百九十二、百九十三、百九十四、百九十五
百九十六、百九十七、百九十八、百九十九、百
條ヲ以テ控訴院ニ屬ス

第五款大審院

高等審院ハ大審院ノ如ク

第十六條 大審院ハ治罪法ニ揭示セル諸上告ヲ受理ス

註曰 大審院ハ徒ニ成テ破獄ヲ願フノ上告ヲ

受理スルナリ

第四條 第六十四條 第七十三條 第七十四條 第三百四十一條 第三百六十

條 第四百一十一條ニ掲載セル職務ヲ管ス

大審院ハ判事七名ヲ集會ス以テ其裁決ヲ為ス

第六款 諸局ノ結構及ヒ裁判ノ事

第十七條 刑事ノ裁決ハ高等裁判官ノ裁決ヲ會同

シタルモノニ依リテ為ス

註曰 此規則ハ破綻スルハ成案ヲ破毀スルコト

アリ有ルニ至ル事

第二百九十二條ハ特別ニ設テ

法律ノ利益ヲ關スル上告ノ調理ハ大

審院判事十一名ニ服同ヲ要ス

又陪審官暫時停止

止ムノ法律第三條ハ他ノ特別ニ設テ

刑若クハ五年以上ノ禁獄ニ至ルハ重罪ヲ

審問スルハ服同判事十名ヲ要ス

第十八條 第十二條 第十三條 第十五條 第十六條ニ依リテ重罪

輕罪ノ受理ヲ任セラルルハ分課

一歳ノ課率ヲ為スカ為メ毎歳首ニ方テ院長

註曰 大審院ノ分課ハ永久ノモノニアラス

其原由ヲ尋ルニ下等裁判所ニ就テ其審理

刑事訴訟法
第十條
第十條
第十條
第十條

ヲ為ス、ハ必ス犯人ノ用ナル所ノ言語ヲ通
用セサルヲ得ス是故ニ審問中犯人ノ應答ニ
通辨官ヲ用ヒスレテ理解シ得ル判事ヲ分課
ニ置クコトヲ要シ大審院分課ノ設立上ニ大
ニ便宜ヲ付與セシモノナリ(貴族院委員ノ報

告
各分課

長判事及ヒ判事補
註曰審理裁判官ハ評議局ノ局員タルヲ得ハ
キヤ否ヤ註解者ハ此問題ニ就キ其所見一ナ
ラス

法律ハ判事補ノ数ヲ定メス千八百七十二年
政府ノ法案ハ之ヲ一名若クハ兩名トセリ
課長補モ亦判事補ノ如ク之ヲ定置スルヲ要ス

司法省

若シ大審院ノ官吏中ニ進退アリテ諸分課中其
職務ヲ保スルヲ得サルモ生シハ院長ハ
本年ノ餘日ニ於テ其分課結構ノ整革ヲ為スコ
トヲ得ヘシ

法裁

第十九條各局投票ニ先タテ必ス討論ヲ為ス法
律ニ準レテ對個人ノ設置ル場合ニ在テハ參
事人最初ニ發言シ判事ニ及フ而レテ判事ノ様

ニ投票ヲ為スヘキ局長ハ最後ニ發言ス又投票
ハ判事最舊ノ者ヨリ始メ最新ノ者ニ終ル

註曰千八百五十年ノ治罪法(第九條)ハ最新ノ
判事ヨリ投票ヲ為シ最舊ノ者ニ終ルヲ規則
トセリ新法典ハ千八百五十三年ノ法典第十
一條ノ規則ヲ取レリ

第二十條法律ニ及スル規則ヲ除クノ外凡テ判
決ハ投票ノ^全數即チ湊合セレ投票全數ノ半分
ニ一ヲ加ヘタル數ヲ以テ之ヲ定ムヘレ

註曰ク第三百六十二條^第四百^第十二條ハ惣局

負ノ^同致^ヲ要スル格別ノ場合ヲ掲載ス

若シ投票^種ノ意見ニ分レ多數^ヲ得ル^得方法

ヲ^施スルコト能ハサル片ハ議長ハ問題ヲ區分シ

再々投票ヲ行ヒ以テ^全數^ヲ得ル方法ヲ試ムヘ

シ而シテ尚ホ其功ヲ奏スル能ハサル片ハ犯罪

人ノ為メニ最モ憂フヘキ意見ノ投票ヲ以テ稍

々之ニ類似セル意見ノ投票ニ合算シテ遂ニ^全數^ヲ得

票ノ多數ヲ得ルニ^終ル

司法省

便宜ナルモノヲ取ル

註曰ク新法典ハ千八百五十年^第千八百五十三年

ノ法典ヨリハ犯人ノ為メニ寬宥ナリ前ノ二

法典ニ在テハ諸院ノ判事定負單數ナリ新法

典ハ其數ヲ雙數^{則チ四}トスルガ故ニ犯人ノ

刑ヲ決スルニ三人ノ投票ヲ合集スルヲ要ス

兩^般ノ意見^何レカ犯罪人ノ為メ便宜ナルカヲ

知^ル要スル片ハ先ツ特別ノ投票ヲ為レテ此

疑團ヲ決セサル可ラス而シテ此投票ニ於テモ

亦其數相半スル片ハ院長ノ投票ヲ以テ之ヲ決

ス

第二十一條裁判^所推^限ノ当否及ヒ審理ヲ^終結

ス^ハ疑團^其他^當初^ノ諸^問題^ハ都^テ

有罪ノ問
題ヲ裁決
スル故ヨリ

投票ノ多数ヲ以テ之ヲ決ス若シ此問題上ニ疑
点ヲ生ズトモ氏定負ノ多数ノ者罪質ノ裁決
為サ、ル可ラスト裁可セシキハ寡数ノ餘負
亦此決裁上ノ投票セサルヲ得ス

第二十二條罪質ノ裁決ヲ為スニ当リテハ糾問
ノ事件ニ就テ犯罪人ハ真ニ其罪ヲ有スルヤ否
ヲ知ルマトノ疑問、處刑ノ疑問ト之ヲ區分レ

必ス先ツ之ヲ投票ニ決スルヲ要ス若シ犯罪人
カ数種ノ事件ニ就テ糾問ヲ受クルハ、各事件
ニ付、其有罪無罪ヲ審決スルヲ要ス處刑上ノ

次議ハ犯罪人ヲ有罪ト認定レタル刑事上ニ
之ヲ為ス可シ、其有罪認定セサル刑事上
處刑ノ問題、投票ヲ為サバルコトヲ得ヘシ然
司法省

ル中ハ其意見ハ投票セシ同員中ノ犯罪人ノ為
メニ最寛ナル意見ヲ採セシ投票中ニ之ヲ加算
スヘシ

第七款裁判所ノ補助人、補佐人、書記官、
第二十三條書記官一名、各官、出、
編纂スルヲ要ス、該官、重罪輕罪ノ事件ニ就
キ当初、審理、案書編纂ヲ擔任セシ

諸屬吏ハ為メニ誓盟ヲ為シ、
第八款刑事裁判所、他ノ諸官廳トノ關係

第二十四條警察官吏、區長、
アルニ當リ、被疑者ヨリ訴へ出サルハ、
重罪輕罪ヲ探索、要、
直ニ着手スルヲ得サルハ、警察官吏機會ヲ

直ニ着手スルヲ得サルハ、警察官吏機會ヲ

誤ラス
其罪証
該官吏及ヒ其補助人ハ刑法上ノ職掌ヲ行ス

ルノ際治罪法ニ豫示セル場合ニ非サルヨリハ

検事
檢事
檢事

ルハ直ニ其着手ノ緣由及ヒ其結果ヲ

檢報局及ヒ審理裁判官ニ通報スルヲ要ス

註曰第八十八條及ヒ百七十七條

ヲ見ルヘシ

第二十五條警察官吏及ヒ其他ノ諸官吏ハ疑ノ

原因
原因
原因

ヲ服セシムル為メニ本人ヲ唆誘シテ犯罪ニ

遊
遊
遊

終結
終結
終結

ハキ
ハキ
ハキ

禁ス此禁ヲ犯ス者ハ嚴刑ニ處ス

第二十六條刑事裁判所ハ他ニ請求スヘキ事件

アレハ政府及ヒ地方ノ諸官廳ト直ニ往復ス

ルノ推ヲ有ス但シイヒストラ

スル者ニ限ル而シテ官廳ノ諸官吏ハ

障
障
障

以テ其請求ニ應酬シ其詐作タルヘク或ハ其

リ
リ
リ

ルコトヲ得ヘシ

リ
リ
リ

ルコトヲ得ヘシ

世巨轄内
可ル

令體ニシテ
ラレサルト
ノ直ニ司法卿ニ屬シ
ルヲ得ス
事ハ徒ニ行法權
六十九年民撰院委員ノ報告書中第三十五
條

第三十一條
檢証或ハ審理
裁判所ノ判決ニ服セサル控訴ノ評議初告院陪
審裁判所ノ提問等皆之ニ干預ス
小檢事ハ地裁裁判所管内ノ諸件ニ干渉スルコ
トヲ得既決未決ノ事件交ヒ未決ノ現状ヲ毎月

中檢事ニ
或ハ之ヲ停閣
審問中ニ欠ク可ラサル處置ヲ設クヘキ事アル
中ハ之ヲ中檢事ニ報告シテ其指揮ヲ受クルヲ
要ス

第三十二條
事件ニ整理シ且ツ總テ本院管内ノ初告院並ニ
其職務ヲ履行スルガ為メニ重罪事件ニ干預ス
ルノ推シ有ス

第三十三條
大審院大檢事ハ刑事裁判所ノ判決法律ヲ犯シ
皇ノ不忠ニシテ事件ヲ整理ス

該憲
於テ
私欲

補

在テ

其報知ヲ
請取ニ又其
相違ト思フ
スル請取ヲ
ナスル權アリ

用即チ法律ヲ錯若クハ其判決條理ニ合ハサル者
アルヲ知りタルトキハ法律ヲ護スルカ为メニ
自己ノ職務或ハ司法卿ノ指揮ニ應ジ之ヲ大審
院ニ上告スヘシ此上告ハ原被トモ定期内ニ上
告セサリシ時ト由大檢事之ヲ为スヘシ又小
檢事其上告スヘキ事ヲ認メタルハ之ヲ中檢
事ニ報告スヘシ中檢事ハ其大檢事ニ報告スヘ
キヤ否ヤヲ判決ス二第百九十九條
第三十四條ハ小檢事ハ刑事ヲ犯セシ者アルヲ知
リタルハ原告ノ求メニ由ラサレハ審判官ニ知
スヘカラサルノ事件ヲ除キ外其職務ヲ以テ
之ヲ執行スル事ヲ其當該裁判所ニ請取ル
セザル可カラズ而シテ事實ヲ發覺スル为メ
審判官ニ請取ルル處置ハ審判官ニ由ル
時ニ限ラズ書類ニ就テ審判官ノ形請取ルル
其報知ヲ要求シ或ハ其職務上ニ請取ルル
ト得ス若シ不規則淹滞等ヲ認見スルニ於テハ
法律ノ檢事ニ許ス所ノ方法ヲ以テ之ヲ矯正ス
ヘシ

小檢事ハ治罪法ニ定メタル分限ヲ踰ヘスレテ
専ラ刑罰施行上ニ干預スルコト
第三十五條ハ小檢事ハ口舌及ヒ書物ヲ以テ其
求ヲ为ス判事ハ必ス之ニ判決ノ宣告案ヲ授示
ス又小檢事ハ口舌及ヒ書物ヲ以テ犯人ノ防
上又ト裁判所ノ疑問上ニ就テ其釋明ヲ为スヘ

審判官
司法省
監察
又何

請取

シテ原質控訴及ヒ上告ニ関スル大議ヲ為ス
場合ヲ除クノ外凡テ初審院ノ評議ニ參會スル
事ヲ得ヘシ然レ氏投票及ヒ裁決ノ法式ニ立
會フ口トモノ権利ヲ有セス

第三十六條小検事ハ警察官吏及ヒ其他政府縣
區ノ諸廳署ト直ニ往來シ及ヒ其補助員或
ハ已ムヲ得サル補員方テハ他ノ官署ヲ經ルコト
ナク直ニ兵力ノ輔佐ヲ求ムルノ権ヲ有ス警察
官吏及ヒ其所管ノ所屬吏ハ小検事ヲ求ムニ從

順スヘシ
第三十七條大検事及ヒ中検事ハ歳終毎ニ一歳
中既決未決ノ刑事及ヒ刑事裁判ノ管理ニ係ル
上申書ヲ司法卿ニ致スヘシ又法律上及ヒ事務

司法省

施行上ニ弊害アルヲ認メタルトキハ亦之ヲ上
申ス可シ

註曰檢事局ハ治罪法ノ特規ニ依テ此他委任
サレタル許多ノ職務ヲ有ス即チ小検事ハ千

八百七十二年四月一日布告セシ民権剥奪施
行上ノ法律ヲ以テ牢獄ノ監督ヲ任ス且ツ行

刑委員ノ一員タルカ故ニ特ニ決議ニ干預ス
ルノミナラス不法ノ決議アルモ之ヲ司法

卿ニ申立ルヲ要ス(千八百七十三年ノ外国法
律年報中ニ就テ此法律ノ訳述ヲ見ルヘシ)千
八百七十一年七月二十五日布告セシ公証人
ノ法律及ヒ千八百七十二年五月一日布告セ
シ代言人ヲ懲戒スル權利施行上ノ法律モ亦

サハ刑事又ハ民事原告人。其地住居ノ
就テ代理人ヲ定ムルハ命スルヲ得ヘシ
且ツ護人名簿中ヨリ商談人ヲ撰ンテ已テ助
ケシムル權利ヲ原告人ニ告知スルヲ得ル

第六章 裁判所ノ権限

第一款 裁判所ノ権限

註ニ易國ニ在テ千八百三年ノ法典施行
中ハ犯人ヲ捕縛シテ地ノ裁判所ニ於
テ其罪ヲ管理ノ規則ナリキ(第
一篇第百十八條及百十九條及ヒ第
二篇第百七十八條及ヒ第百八十二條)
千八百五十年ノ法典ニ依レハ犯罪地ノ
裁判所ヲシテ管理セシムルハ格外ノ

司法省

規則ニ係ル(第六十條第六十二條)犯人居住
若クハ寄留地ノ裁判所ハ豫定サレシニ
ツノ場合ニ在テ犯罪管理處方ニ擔任ス
モ其一被害者ヨリ犯人居住若クハ寄留
地ノ裁判所ニ事案ヲ告シ其事件ヲ犯罪
地ノ裁判所ニ送致セシムルコトヲ願ハサル
片其二審理ヲ要スル所ノ刑事ヲ外國ニ
在テ犯セシ片是ナリ(第六十五條)此第二
ノ場合ニ在テハ若シ犯罪人國內ニ居住
若クハ寄留セサル片ハ之ヲ拘捕シテ地
方ノ裁判所ニ於テ其處分ヲ任セシムヘ

千八百五十三年ノ法典ニ略此主義ト同